

# 有田・小田部 31

- 有田遺跡群第181次、184次調査報告書 -

1 9 9 8

福岡市教育委員会

# 有田・小田部 31

— 有田遺跡群第181次、184次調査報告書 —



遺跡調査番号 ART-181  
調査番号 9607  
遺跡略号 ART-184  
調査番号 9676

1 9 9 8

福岡市教育委員会

## 序

「活力あるアジアの拠点都市」として都市づくりを進めている福岡市は、古くから我が国と大陸との主要な窓口でした。とりわけ、市域の西部にあたる早良平野には最古の王墓と呼ばれる吉武高木遺跡など、数多くの重要な遺跡が知られています。本市では、特に文化財の保護・活用に努めており、失われていく遺跡については、記録保存のための発掘調査を実施しています。

今回報告する有田遺跡群は早良平野の拠点的地域で、これまでにも縄文時代晚期から近世にかけての重要な遺構、遺物が発見されています。

本書は1996年度実施しました有田遺跡群の第181、184次調査の報告書であります。調査の結果、古墳時代後期～古代にかけての大型の倉庫群が発見され、有田遺跡群の性格を考えるうえで多大な成果を得ることができました。

本書が市民の皆様の文化財への認識と理解の一助となり、学術研究の資料になれば幸いです。

最後になりましたが、坂口武雄様、NTT九州移動通信網株式会社様をはじめとする関係各位のご協力に対して厚く感謝の意を表します。

平成10年3月30日

福岡市教育委員会

教育長 町田英俊

## 例　　言

- 1.本書は福岡市教育委員会がビル建設などの開発事業に伴って1996年度に実施した、有田遺跡群第181、184次調査地点の報告書である。
- 2.本書に使用する遺構実測図は菅波正人、辻節子が、遺物実測図は菅波、池崎謙二が作成した。製図は井上かおり、松浦一ノ介、林田憲三が行った。
- 3.本書に使用する遺構、遺物写真は菅波が撮影した。
- 4.本書に使用した座標は国土座標第II座標系である。方位は磁北で、座標北から $6^{\circ}02'$ 西偏する。
- 5.本書の執筆、編集は菅波が行った。なお、第3章2-7)、8)については福岡市埋蔵文化財センター吉留秀敏氏に原稿を頂いた。
- 6.今回報告する遺構、遺物に関する記録は埋蔵文化財センターで一括収蔵、保管し、公開、活用していく予定である。

## 目 次

第1章 はじめに	.....	1
1. 調査に至る経緯	.....	1
2. 調査の組織	.....	1
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	.....	2
1. 位置と立地	.....	2
2. 歴史的環境	.....	2
3. これまでの調査成果	.....	4
第3章 第181次調査の記録	.....	7
1. 調査の概要	.....	7
2. 調査の記録	.....	9
1) 貯蔵穴 (SU)	.....	9
2) 壕穴住居跡 (SC)	.....	16
3) 樋 (SA)、掘立柱建物跡 (SB)	.....	17
4) 渾 (SD)	.....	23
5) 土坑 (SK)、井戸 (SE)	.....	24
6) その他の出土遺物	.....	27
7) 有田181次調査出土の石器資料	.....	28
8) 有田・小田部遺跡の旧石器時代資料	.....	28
3. 小結	.....	30
第4章 第184次調査の記録	.....	37
1. 調査の概要	.....	37
2. 調査の記録	.....	39
1) 渾 (SD)	.....	39
3. 小結	.....	42

## 挿 図 目 次

Fig.1 有田遺跡群と周辺の遺跡 (1/50000)	.....	3
Fig.2 有田遺跡群調査地点位置図 (1/8000)	.....	5
Fig.3 第181次調査地点位置図 (1/1000)	.....	7
Fig.4 第181次調査地点遺構配置図 (1/200)	.....	8
Fig.5 SU011、018、019、020、021遺構実測図 (1/40)	.....	10
Fig.6 SU022、023、024、026、028遺構実測図 (1/40)	.....	11
Fig.7 貯蔵穴出土遺物実測図 1 (1/4、1/3)	.....	13
Fig.8 貯蔵穴出土遺物実測図 2 (1/4、1/3、1/2)	.....	14
Fig.9 貯蔵穴出土遺物実測図 3 (1/4)	.....	15
Fig.10 SC013遺構実測図及び出土遺物実測図 (1/40、1/4)	.....	16
Fig.11 SA003、SB005、006遺構実測図 (1/100)	.....	18
Fig.12 SB008、009遺構実測図 (1/100)	.....	19
Fig.13 SB007、029遺構実測図 (1/100)	.....	20

Fig.14	掘立柱建物出土遺物実測図 (1/3、1/4)	21
Fig.15	SD001、002、004土層実測図及び出土遺物実測図 (1/40、1/3、1/4)	23
Fig.16	SK010、012、014、025遺構実測図及び遺物実測図 (1/40、1/3、1/4)	25
Fig.17	土坑及び井戸出土遺物実測図 (1/3)	26
Fig.18	柱穴出土遺物実測図 (1/2、1/3、1/4)	27
Fig.19	有田181次出土石器実測図 (1/1)	28
Fig.20	有田・小田部台地の旧石器時代の遺跡	28
Fig.21	有田遺跡群第181次調査地点遺構変遷図 (1/500)	29
Fig.22	有田遺跡群第107次、181次調査建物変遷図 (1/500)	33
Fig.23	有田遺跡群第107、181次調査地点周辺建物分布 (1/1200)	34
Fig.24	第184次調査地点位置図 (1/1000)	37
Fig.25	第184次調査地点遺構配置図 (1/200)	38
Fig.26	SD001、002、003土層実測図 (1/40)	39
Fig.27	溝出土遺物実測図1 (1/3、2/3、1/2)	40
Fig.28	溝出土遺物実測図2 (1/3)	41

## 図版目次

巻頭 有田遺跡群第181次調査地点検出掘立柱建物跡

- PL. 1 1. 有田遺跡群第181次調査地点全景（西から）  
2. 有田遺跡群第181次調査地点全景（北から）
- PL. 2 1. SU011完掘（北から）  
2. SU018完掘（北から）
- PL. 3 1. SU019完掘（東から）  
2. SU021完掘（南から）
- PL. 4 1. SU020完掘（北から）  
2. SU020遺物出土状況（東から）
- PL. 5 1. SU022完掘（南から）  
2. SU026完掘（東から）
- PL. 6 1. SC013完掘（東から）  
2. SA003及びSB005、006検出状況（北から）
- PL. 7 1. SB005柱穴断ち削り（南から）  
2. SB006柱穴断ち削り（南から）
- PL. 8 1. SB005、006完掘（南から）  
2. SB007、008検出状況（北から）
- PL. 9 1. SB008柱穴断ち削り（北から）  
2. SB009完掘（南から）
- PL. 10 1. SB009根固め石検出状況（南から）  
2. SD001完掘（北から）
- PL. 11 1. SD002土層堆積（東から）  
2. SK012完掘（西から）
- PL. 12 1. SK014完掘（西から）  
2. SK025完掘（西から）
- PL. 13 1. 有田遺跡群第184次調査全景（北から）  
2. SD002、003完掘（北から）
- PL. 14 1. SD002完掘（西から）  
2. SD001完掘（北から）

# 第1章 はじめに

## 1. 調査に至る経緯

埋蔵文化財課では開発計画が上がると試掘調査を実施し、各地点の状況の把握を努めている。その上で、地権者と遺跡保全のために設計変更等の協議を持つ。しかし、建物の構造上、地下の遺構に影響を及ぼす場合、地権者との協議を持って、記録保存のための調査を実施している。

有田遺跡群は昭和41年に九州大学考古学研究室によって、第1次調査が行われて以来、縄文時代～中世にわたる代表的集落遺跡として知られてきた。しかし、現在、有田遺跡群が所在する有田・小田部地区は都市近郊の住宅地として宅地化が進み、個人住宅、共同住宅等の建築により日々町並みは変化している。昭和50年以降、有田遺跡群は重点地区の一つとして、1000m<sup>2</sup>以下の個人の専用住宅についても国庫補助を得て調査を行ってきた。その結果、発掘調査は1997年度現在、187次に及ぶ。1996年度は第181～184次までの4地点の調査が行われた。

本書は1996年度行われた第181次、184次の2調査地点の調査報告書を掲載する。

## 2. 調査組織

調査は以下に示す組織構成で実施した。調査に際しては坂口武雄様、NTT九州移動通信網株式会社様をはじめとした関係者の方々には条件整備等で大変御世話になりました。また、調査中は地域の住民の皆様をはじめとして数多くの方々にご協力を頂いた。また、整理に際しては吉留秀敏、白井克也氏には有益なご教示を頂いた。ここに記して謝意を表します。

調査委託	第181次・坂口武雄、第184次・NTT九州移動通信網株式会社
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 町田英俊
文化財部長	後藤直（前任） 平塚克則
埋蔵文化財課長	荒巻輝勝
埋蔵文化財第一係長	横山邦維（前任） 二宮忠司
調査庶務	埋蔵文化財第一係 西田結香 浅原千晶（前任） 河野淳子
調査担当	埋蔵文化財第一係 菅波正人
調査作業	加島定次郎 栗木和子 江節子 徳永洋二郎 烏井原良治 原美晴 船越恒夫 堀本歳四郎 松本みづ子 三谷朗子 横尾泰広 吉川順岳
整理補助	井上かおり
整理作業	山田順子 田中安恵

調査番号	9607	遺跡略号	ART181	分布地図	082	調査番号	9676	遺跡略号	ART184	分布地図	082
所在地	早良区有田1丁目31-3	所在地	早良区有田1丁目32-8								
調査対象面積	524m <sup>2</sup>	調査面積	494m <sup>2</sup>	調査対象面積	265m <sup>2</sup>	調査面積	150m <sup>2</sup>				
調査期間	1996年4月15日～6月15日	調査期間	1997年3月24日～4月11日								

## 第2章 遺跡の位置と歴史的環境

### 1. 遺跡の位置

福岡市の西側に位置する早良平野は、東側を平尾丘陵、南側を背振山系、西側を背振山から派生した叶ヶ岳に囲まれる。北は博多湾に面し、平野の中央には室見川が貫流する。平野内には幾つかの洪積台地も点在するが、大部分は室見川と西から十郎川、名柄川、金屑川等の沖積作用によって形成されたものである。また、室見川の河口には愛宕山、龜原山等の第三紀の独立丘陵が存在する。一方、海岸部には湾内の回流作用によって、生ノ松原、百道浜等の弓状の砂丘が形成される。砂丘の南側は古代においてラグーンをなしていたと考えられる。

有田遺跡は室見川の右岸の中位段丘上に立地する。国土地理院刊行の1/50000の地形図「福岡」では、図幅上端から23cm、左端から15cmの位置にある。

有田遺跡群は旧石器時代から近世にかけての複合遺跡で、早良平野の拠点的集落の一つである。特に弥生時代初頭には環濠が掘削され、以後、古墳時代にかけて連続と集落は形成される。弥生時代の墓地遺構では細形銅剣、銅戈、前漢鏡、小型仿製鏡等を副葬した壺棺墓が検出されている。一方、古墳時代では堅穴住居跡等から陶質土器や軟質土器が多く出土し、半島との間わりの強さを伺うことができる。また、古墳時代後期から奈良時代にかけては橋や溝に区画された大型の倉庫群が各所に營まれており、官衙的施設の存在が指摘されている。早良平野は律令期では早良郡にあたり、「和名抄」によると、毗伊、能解、額田、早良、平群、田部、曾我の7郷が存在する有田遺跡はそのうちの田部郷に含まれるものと考えられている。

### 2. 周辺の遺跡

早良平野の遺跡は地形的に見ると、海岸線の砂丘上、室見川及び十郎川、金屑川流域の沖積微高地、油山から北西に派生する低丘陵、背振山から北に派生する西山、飯盛山、叶ヶ岳の東側台地等に分布する。ここでは弥生時代から古墳時代の遺跡について概観する。

砂丘上の遺跡を見ると、藤崎遺跡は1912(明治45)年に箱式石棺から三角縁二神龍虎鏡、素環頭太刀が出土したことから知られるようになった。その後も、弥生時代前期以降の壺棺墓地や三角縁二神二馬鏡を副葬した方形壺蓋墓等が検出され、弥生時代～古墳時代にかけての墓地遺跡として周知されている。藤崎遺跡の東側に隣接して西新町遺跡がある。弥生時代中期から古墳時代前期にかけての堅穴住居跡、壺棺墓が数多く検出されている。遺物では弥生時代中期の壺棺墓からはゴホウラ製貝輪や銅剣の切先等が出土している。また、弥生時代終末から古墳時代前期にかけては畿内系、山陰系の搬入土器や半島産の陶質土器、大型板状鉄製品等が出土しており、国内外の各地との盛んな交流を伺うことができる。姪浜遺跡では弥生時代中期を主体とした堅穴住居跡、壺棺墓が検出され、漢式三角鏡、半島系無文土器、南海産の貝輪未製品、貝玉、西部瀬戸内系の搬入土器等が出土している。遺跡の主体の時期は異なるが、西新町遺跡同様、対外交流に深く関わったことを示している。砂丘南側の独立丘陵上にある五島山古墳では箱式石棺から二神二獸鏡、鉄劍、銅鏡等が出土している。

室見川東岸流域の沖積微高地では北から田村遺跡群、四箇遺跡群、重留遺跡群、東入部遺跡群等が分布する。これらは遺跡群全体で見ると、縄文時代から中世にかけて集落が連続と形成されている。弥生時代では前期前半の段階には壺棺墓や堅穴住居跡等が見られるが、有田遺跡に見られる環濠集落



Fig. 1 有田遺跡群と周辺の遺跡 (1/50000)

- |         |          |             |
|---------|----------|-------------|
| 1 吉武遺跡群 | 7 拝塚古墳   | 13 抬六町ツイジ遺跡 |
| 2 太田遺跡  | 8 有田遺跡群  | 14 宮ノ前遺跡    |
| 3 羽根戸遺跡 | 9 原遺跡群   | 15 野方遺跡     |
| 4 都地遺跡  | 10 藤崎遺跡群 | 16 東入部遺跡群   |
| 5 田村遺跡群 | 11 西新町遺跡 | 17 野方岩名隈遺跡  |
| 6 四箇遺跡群 | 12 五島山古墳 |             |

(○ 遺跡群  
 (● 遺跡  
 (■ 古墳)

はまだ検出されておらず、前期段階では存続時期の短い集落が点在していたことを伺うことができる。しかし、前期後半から後期初頭にかけての甕棺墓、木棺墓、土壙墓が検出された東入部遺跡群では細形銅剣、銅劍、鉄刀等の副葬品が出土し、当該地域での有力集団の存在が指摘されている。古墳時代では重留遺跡群で前方後円墳が見られる。押塚古墳は全長75mを測り、鍵形の周濠が巡る。墳丘の大半は削平されているが、周濠には8ヶ所に陸橋がつく。また、周濠内から、円筒埴輪、壺形埴輪、形象埴輪（武人）、器材埴輪（家形、桶形等）が多数出土している。築造の時期は5世紀前後と考えられている。この古墳の南側数百mには方形周溝墓群が營まれている。早良平野に押塚古墳以前は首長墓と言える前方後円墳は見られず、その出現の要因については畿内勢力の進出等が考えられている。

室見川東岸の飯倉丘陵上では舌状部単位にAからH群に分けられた飯倉遺跡群がある。早くから宅地化が進んだため、遺跡群の全体像は不明確であるが、飯倉C遺跡（飯倉唐木遺跡）ではこれまでに弥生時代前期から中期末の甕棺墓が検出され、甕棺墓から細形銅劍、素環頭太刀等が出土している。また、飯倉G遺跡では1次調査で、弥生時代の小型彷彿鏡を副葬した木棺墓が検出されている。飯倉F遺跡でも銅鏡片が出土しており、この地域にも有力集団が存在していたことを伺うことができる。一方、飯倉D遺跡では1次調査で、弥生時代後期後半以降の堅穴住居跡から小型彷彿鏡と銅矛の鋒型が出土しており、青銅器製作の工房と考えられている。古墳時代では油山から飯倉丘陵西側にかけては多くの群集墳が存在するが、これらに先行する形で、小型の前方後円墳が築造される。クエゾノ1号墳は全長22~25mの5世紀中頃の前方後円墳で、墳墓主体は2基で、箱式石棺と刳り貫きの木棺である。墳丘には半島産の陶質土器の大甕が埋置される。近接する後続の円墳の5号墳からは鉄鋤、鉄槌等の鍛冶道具が出土している。被葬者として半島との繋がりの強い集団が想定されている。梅林古墳はクエゾノ1号墳の北側約500mにあり、5世紀末に築造された全長約27mの前方後円墳で、横穴式石室から須恵器、土師器、馬具、鉄鎌、鑿等が出土している。

室見川西岸から十郎川流域にかけての沖積地では集落や墳墓遺構の検出例は少ないが、拾六町平田遺跡、石丸占古遺跡、拾六町ツイジ遺跡、橋本遺跡では縄文時代晩期末から弥生時代初頭にかけての多量の土器と共に、大陸製磨製石器等が出土している。該期の明確な水田遺構はまだ発見されていないが、初期段階の低湿地域での水田経営の一端を伺うことができる。

飯盛山から叶ヶ岳にかけての西側台地では多くの集落遺跡、墳墓遺跡が見られる。宮ノ前遺跡では弥生時代終末から古墳時代初頭の墳墓群が検出されている。野方中原遺跡は弥生時代後期から古墳時代にかけての集落群と墓地群が検出されている。弥生時代後期では大小の円形(90×110m以上)と方形プラン(25×30m)の環濠が削削される。円形環濠の内部には多数の堅穴住居跡が、方形環濠の内部には掘立柱建物が3棟検出され、弥生時代の環濠集落の展開を考える上で重要な資料として捉えられている。古墳時代においても100軒を越す堅穴住居跡が検出され、箱式石棺墓から獸帶鏡や内行花文鏡、勾玉等が出土している。野方中原遺跡の東側にある野方久保遺跡では弥生時代前期末から中期末の甕棺墓が多数検出されている。2次調査では甕棺墓から細形銅劍、把頭飾、鉄鎌等が出土している。吉武遺跡群は旧石器時代から中世に至る複合遺跡である。弥生時代では多錐細文鏡、細形銅劍、銅矛、銅戈、勾玉等を副葬した木棺墓や甕棺墓が検出された吉武高木遺跡、墳丘墓が検出された吉武鶴渡遺跡等の存在は「早良王墓」と呼ばれるように当該地域に大きな勢力があったことが示している。一方で、金武や西山の丘陵上の浦江谷遺跡、長峰遺跡でも小規模の甕棺墓地が形成される。古墳時代では弥生時代中期の墳丘墓を利用し、5世紀中頃の帆立貝式の橋渡古墳が築造される。また、陶質土器や初期須恵器を副葬した古墳も多数検出されている。半島との強い繋がりを伺うことができる。後期の群集墳では山麓部の羽根戸、金武地区に多数分布する。



Fig. 2 有田遺跡群調査地点位置図 (1/8000)

## 有田遺跡群報告書一覽

- 「有田周辺遺跡調査概報」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第43集』1977
- 「有田・小田部 1」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第58集』1980（第17次、第21次、第22次、第23次、第24次、第25次、第26次、第27次調査）
- 「有田・小田部 2」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第81集』1982（第7次、第8次、第28次、第29次、第31次、第33次、第34次調査）
- 「有田・小田部 3」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第84集』1982（第59次調査）
- 「有田・小出部 4」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第96集』1983（第19次、第32次、第36次、第37次、第38次、第40次、第41次、第42次、第45次調査）
- 「有田・小田部 5」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第110集』1984（第30次、第44次、第46次、第47次、第48次、第49次、第55次、第63次、第75次調査）
- 「有田・小田部 6」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第113集』1985（第5次、第39次、第51次、第53次、第56次、第57次、第66次、第76次、第86次調査）
- 「有田遺跡群」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第129集』1986（第81次調査）
- 「有田・小田部 7」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第139集』1986（第52次、第59次、第60次、第82次、第83次、第87次、第95次、第97次、第101次調査）
- 「有田・小田部 8」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第155集』1987（第3次、第43次、第64次、第108次調査）
- 「有田・小田部 9」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第173集』1988（第35次、第70次、第71次、第72次、第102次、第105次、第109次、第111次、第117次、第122次調査）
- 「有田・小田部 10」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第212集』1989（第100次、第103次、第130次、第134次調査）
- 「有田・小田部 11」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第234集』1990（第107次、第113次、第120次、第131次、第133次、第146次、第149次調査）
- 「有田・小田部 12」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第264集』1991（第119次、第121次、第126次、第127次、第128次、第129次、第144次、第156次、第157次調査）
- 「有田・小田部 13」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第265集』1991（第152次調査）
- 「有田・小田部 14」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第266集』1991（第118次、第123次、第139次、第155次、第161次調査）
- 「有田・小田部 15」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第307集』1992（第154次、第159次、第163次、第165次調査）
- 「有田・小田部 16」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第308集』1992（第110次、第112次、第114次、第116次、第138次、第158次、第164次調査）
- 「有田・小田部 17」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第339集』1993（第160次、第169次調査）
- 「有田・小田部 18」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第340集』1993（第125次、第135次、第140次、第145次、第148次調査）
- 「有田・小出部 19」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第377集』1994（第6次、第50次、第58次、第61次、第65次、第67次調査）
- 「有田・小田部 20」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第378集』1994（第136次、第141次、第142次、第143次調査）
- 「有田・小田部 21」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第426集』1995（第147次、第153次調査）
- 「有田・小田部 22」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第427集』1995（第54次、第68次、第69次、第73次調査）
- 「有田・小田部 23」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第470集』1996（第4次、第176次調査）
- 「有田・小田部 24」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第471集』1996（第74次、第77次、第78次調査）
- 「有田・小出部 25」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第472集』1996（第172次調査）
- 「有田・小出部 26」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第473集』1996（第170次、第173次調査）
- 「有田・小田部 27」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第512集』1997（第178次調査）
- 「有田・小田部 28」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第513集』1997（第175次、第177次、第179次調査）
- 「有田・小田部 29」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第538集』1997（第78次、第79次調査）

### 第3章 第181次調査の記録

#### 1. 調査の概要

本調査地点は、早良区有田1丁目31-3に所在し、有田遺跡群の中央部最高所の西側にある。本調査地点の南西隅は昭和43年に九州大学考古学研究室によって、東西4m、南北5mの範囲が調査されている（報告書では18街区にあたる）。この調査では堅穴住居跡及び溝等の遺構が確認されている。今回報告するSC013、SD001がそれに相当する。

これまでの周辺の調査では東側隣接地の第107次調査で古墳時代後期から奈良時代にかけての橋や溝に区画された倉庫群等が検出されており、都衙等の官衙施設と推測されている。また、西側30m先にある第95次調査地点では板付I式期の環濠が検出されており、本調査地点は環濠の内側にあたることになる。今回の調査ではこれらの周辺調査に関連する遺構、遺物を数多く検出した。

調査は約20~30cmの耕作土を搬出した後に行った。耕作土を除去すると、基盤の鳥居ロームとなり、その面で遺構の検出作業を行った。遺構面の標高は約13.2mである。

遺構は弥生時代前期の貯蔵穴10基、古墳時代前期の堅穴住居跡1軒、古墳時代後期から奈良時代の掘立柱建物跡5棟、橋1条、溝2条、中世の掘立柱建物跡1棟、溝1条、土坑3基、井戸1基、柱穴等を検出した。遺物は貯蔵穴から縄文土器、弥生土器、石包丁、磨製石鑿、磨製石斧等、掘立柱建物跡から須恵器等が出土した。また、古代の溝の覆土からナイフ型石器が1点出土した。調査は1996（平成8）年4月15日～6月15日まで実施した。調査面積は494m<sup>2</sup>である。

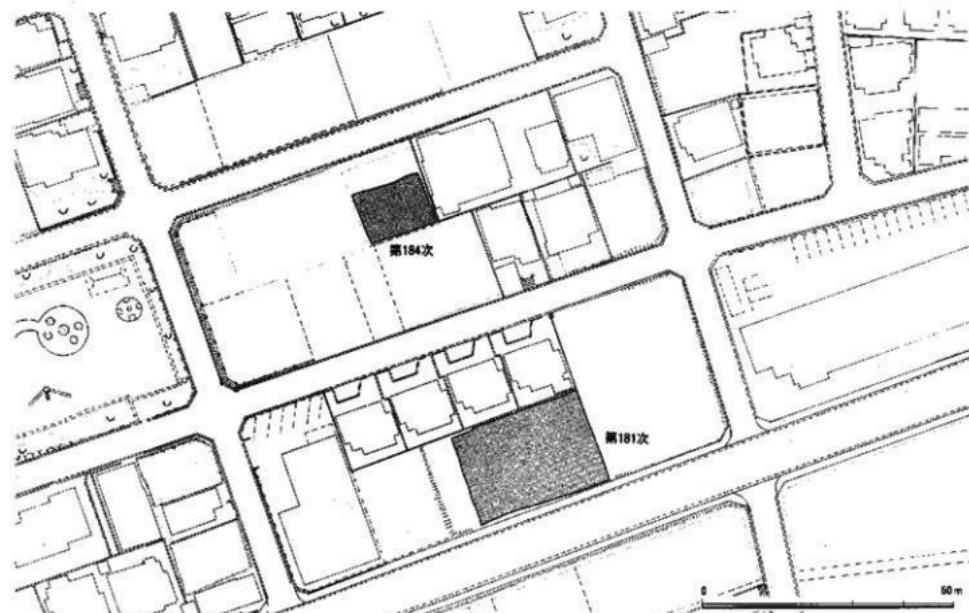
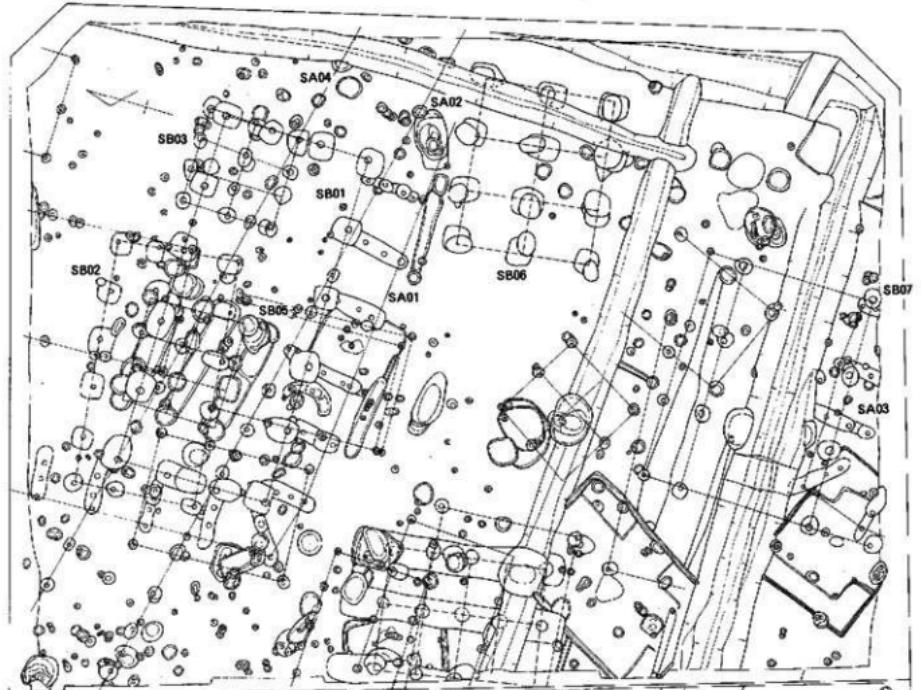


Fig. 3 第181次調査地点位置図 (1/1000)



第107次

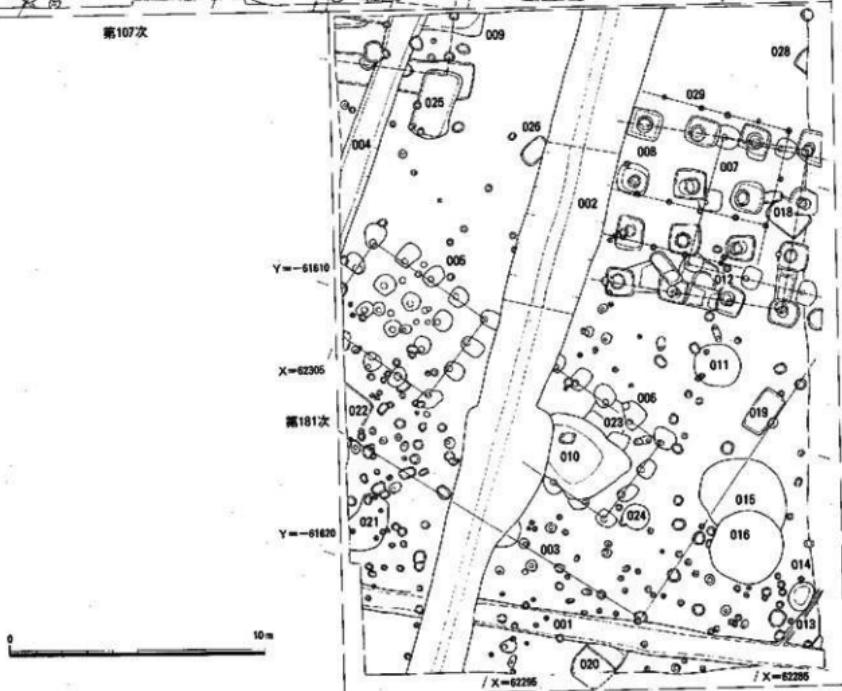


Fig. 4 第181次調査地点遺構配置図 (1/200)

## 2. 調査の記録

### 1) 貯蔵穴 (SU)

今回の調査では10基の貯蔵穴を検出した。貯蔵穴は分布の状態から更に調査区外にも広がると考えられるが、東西の隣接地の第107次調査、第187次調査では検出されていない。従って、遺構の分布は南北に広がるものと考えられる。遺構の遺存状態はあまりよくなく、入口部分の旧状と留めているものはほとんどない。坑壁は袋状を呈するもの、直立するものがある。坑底の平面形は円形、長方形、橢円形がある。残存する遺構の深さは20~190cmで、本来は深さ2mを超えるものもあったと考える。しかし、床面が鳥栖ローム層を掘り抜いて、八女粘土層まで達しているものはない。深さは長方形プランのものは50cm前後と浅いものが多い。床面に柱穴等を持つものは見られなかった。

埋土は貯蔵穴として使用しなくなった後に流れ込んだ暗褐色系の粘質土がレンズ状に堆積するものが多いが、中には使用後すぐに地山の鳥栖ロームで埋め戻しているものもある。

貯蔵穴は調査区全域に分布するが、切り合は見られない。長方形プランのものは主軸方位を東西にとるものと南北にとるもの認められる。遺物は上器（刻目突帯文土器、弥生土器の壺、壺、鉢、高杯）、石器（磨製石斧、石包丁、磨製石鐵、黒曜石原石等）が出土した。遺物はほとんど廃棄されたもの、もしくは流れ込んだもので、坑底に据えられていた状態のものははない。遺構の時期は概ね、弥生時代前期前半（板付I式）から中頃（板付IIa式）におさまるものである。

#### SU011 (Fig. 5)

調査区中央南側に位置する。平面形は円形で、壁は袋状に立ち上がる。長径226cm、短径186cm、深さ184cmを測る。埋土は上面壁際には崩れ落ちたロームが、それ以下はロームと暗褐色粘質土、黒色粘質土が凸レンズ状に堆積する。本来の入口部分はかなり窄まっていたと考えられる。遺物は主に最下層の黒色粘質土から出土した。完形復元出来るものもあるが、出土状況から貯蔵穴が廃絶した後に、廃棄もしくは流れ込んだものであろう。遺物は刻目突帯文土器、弥生土器、磨製石斧、石包丁、黒曜石剥片等が出土した。

出土遺物 (Fig. 7-1~26) 1~3は刻目突帯文土器、4~24は弥生土器である。1は胴部で屈曲する二条突帯の深鉢と考えられる。1~3の器面の調整は擦痕が施される。4~6は壺である。7は壺として図化したが、上下逆で鉢の可能性もある。8~14は如意形口縁の壺である。8、9は口唇部全面に、10~13は下端に刻目が施される。11は胴部上半に浅い沈線が施される。15~18は壺底部である。15はハの字形に開く厚い底部である。18は底面に焼成後穿孔が施される。19、20は鉢である。21は蓋である。天井部は窪む。22~24は高杯である。22は口縁内面が肥厚する。23、24は接合部に一条の突帯が施される。25、26は結晶片岩製の石包丁である。26は未製品である。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期中頃に位置づけられる。

#### SU018 (Fig. 5)

調査区南東側に位置する。平面形は長方形で、壁は直立する。長さ160cm、幅116cm、深さ20cmを測る。埋土は床面には黒色粘質土が、それ以上は暗褐色粘質土混じりのロームが堆積する。遺物は少なく、刻目突帯文土器、弥生土器、黒曜石剥片が床面近くから出土した。

出土遺物 (Fig. 8-27、28) 27は刻目突帯文土器の深鉢の胴部である。突帯は大きめ、刻目も深い。器面の調整は擦痕である。28は高杯である。口縁内面が肥厚する。

本貯蔵穴は出土遺物は少ないが、弥生時代前期に位置づけられる。

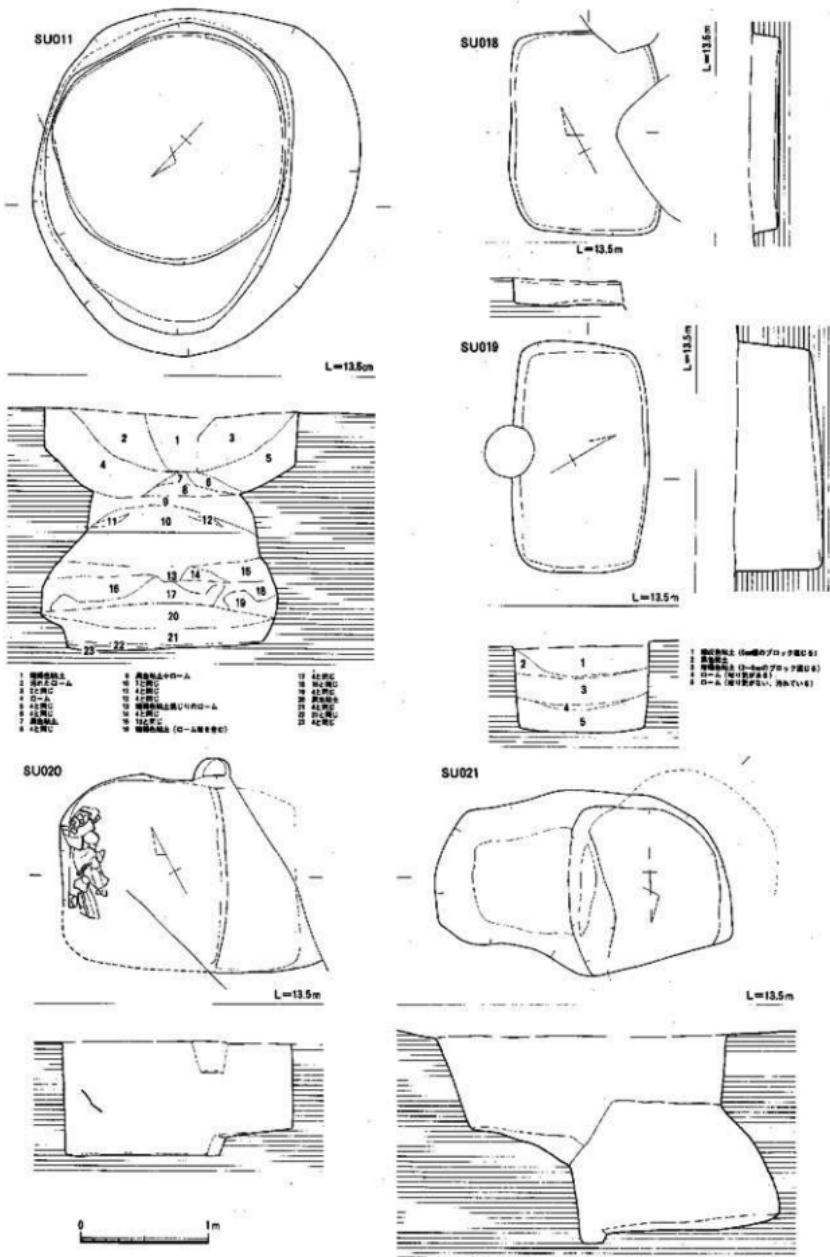


Fig. 5 SU011, 018, 019, 020, 021遺構実測図 (1/40)

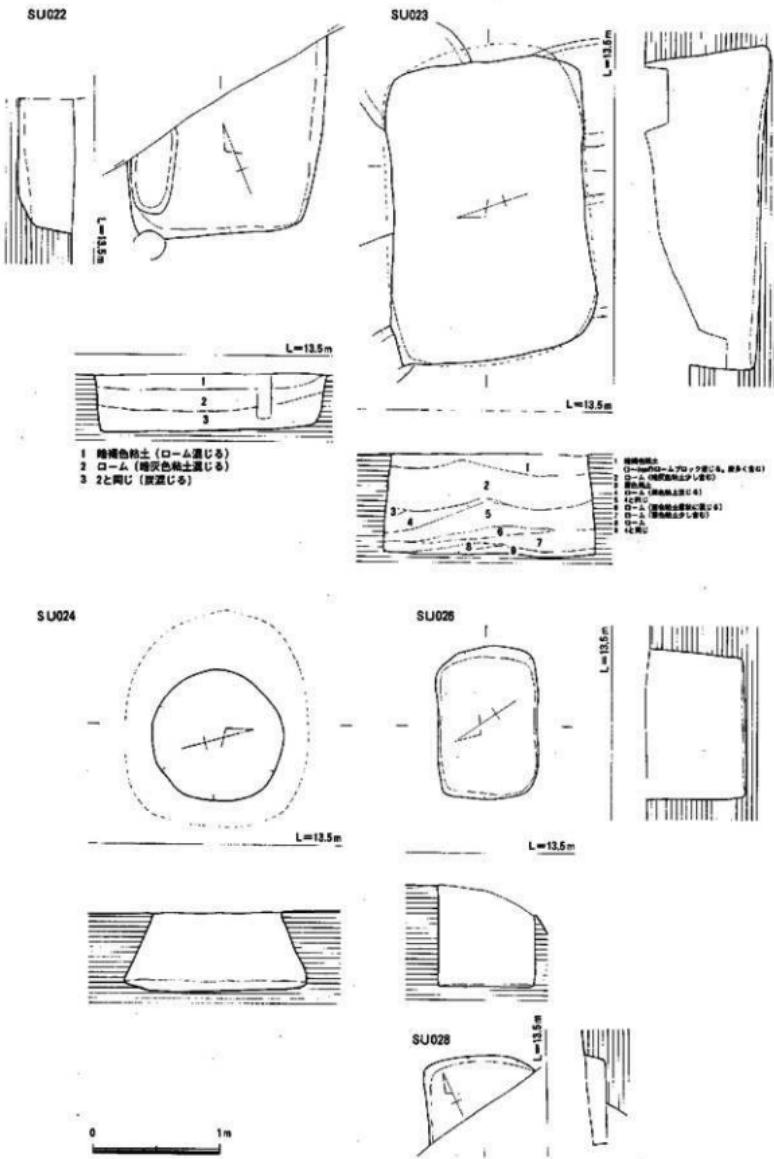


Fig. 6 SU022, 023, 024, 026, 028遺構実測図 (1/40)

#### SU019 (Fig. 5)

調査区中央南側に位置する。平面形は長方形で、壁は直立する。長さ182cm、幅108cm、深さ66cmを測る。埋土は床面には汚れたロームが、それ以上はローム混じりの暗褐色粘質土混じりが堆積する。遺物は少なく、刻目突帯文土器、黒曜石剝片が出土した。

出土遺物 (Fig. 8-29) 29は刻目突帯文土器の深鉢である。突帯は口唇部につき、刻目はO字形で深い。

本貯蔵穴は出土遺物が少ないが、弥生時代前期に位置づけられる。

#### SU020 (Fig. 5)

調査区西側に位置し、遺構の一部は調査区外に広がる。平面形は長方形で、壁は若干袋状に立ち上がる。床面の東側はベッド状に20cmほどの段差がつく。現存長200cm、幅150cm、深さ90cmを測る。埋土はロームまじりの暗褐色粘質土が堆積する。遺物は床面から30cmほど浮いたところで完形復元出来る弥生土器壺等が出土した。遺物は刻目突帯文土器、弥生土器、磨製石鏃、黒曜石原石、剥片等が出土した。

出土遺物 (Fig. 8-30~46) 30、31は上層で、それ以外は下層から出土した。32~35は刻目突帯文土器、30、31、36~45弥生土器である。32は二条突帯の深鉢で、刻目は小さく浅い。器面の調整はナデである。33、34の突帯は口唇部につき、刻目は浅い。調整は擦痕である。30、38、39は小型の壺で、30は口縁と肩部に不明瞭な段がつく。38は肩部に沈線状の段がつく。39は上げ底の底部である。31、36、37は大型の壺で、口縁は緩やかに外反し、口縁外面は粘土帶を貼り付けて肥厚する。器面には赤色顔料を塗布していたと考えられる。40は高环で、口縁は緩やかに外反し、内面は肥厚する。41~43は如意形口縁の壺で、口唇部全面に刻目を施す。43は開き気味の底部で、底面に木の葉の圧痕が残る。44、45は平底の壺底部である。46は柳葉形の磨製石鏃である。基部は欠損している。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期前半に位置づけられる。

#### SU021 (Fig. 5)

調査区中央北側に位置し、遺構の一部は調査区外に広がる。平面形は梢円形で、壁は袋状に立ち上がる。床面の東側はベッド状に100cmほどの段差がつく。長さ230cm、幅146cm、深さ154cmを測る。埋土はロームまじりの暗褐色粘質土が堆積する。遺物は刻目突帯文土器、弥生土器、黒曜石剝片等が出土した。

出土遺物 (Fig. 9-47~56) 47~52は埋土の上層で、それ以外は下層から出土した。47は刻目突帯文土器の深鉢で、口唇部に突帯がつき、刻目は深く、間隔は狭い。48~52は壺である。口縁は緩やかに外反し、50は口縁外面が肥厚する。53は開き気味の壺底部で、底面に木の葉の圧痕が残る。54は壺胴部で、ヘラ描きの重弧文が施される。55は如意形口縁の壺で、口唇部全面に浅い刻目が施される。56は鉢で、胴部に段がつく。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期中頃に位置づけられる。

#### SU022 (Fig. 6)

調査区中央北側に位置し、遺構の一部は調査区外に広がる。平面形は長方形で、壁は直立する。床面の西側に浅い溝みがある。現存長150cm、幅150cm、深さ46cmを測る。埋土は暗灰色粘質土まじりのロームが互層に堆積する。遺物は弥生土器片が少量出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期に位置づけられる。

#### SU023 (Fig. 6)

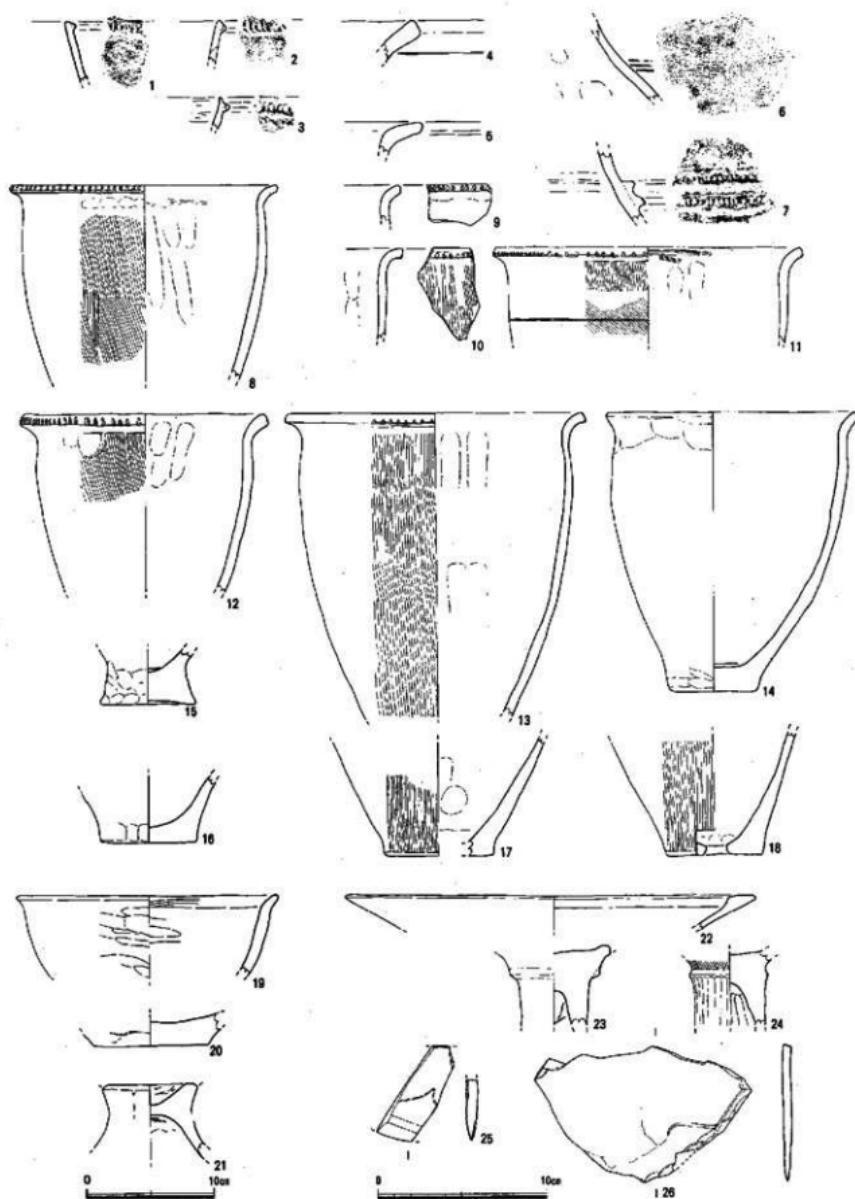


Fig. 7 貯藏穴出土遺物実測図 1 (1/4, 1/3)

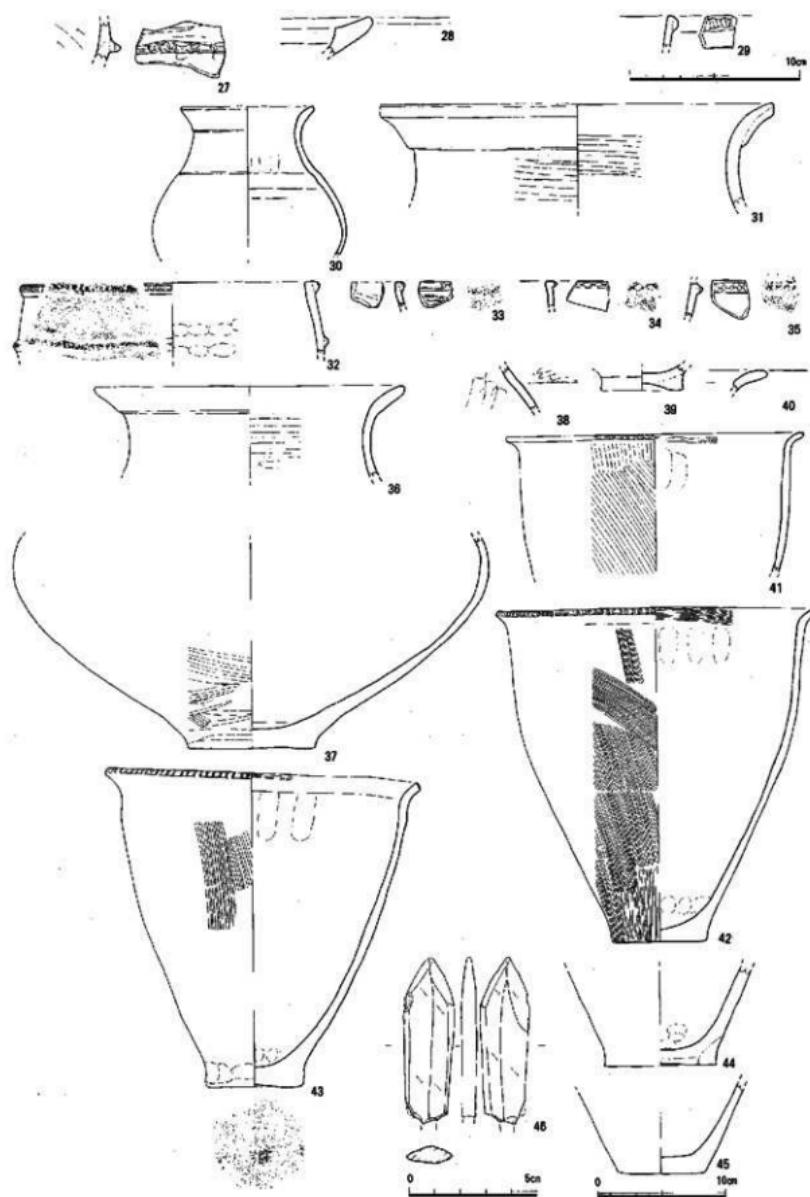


Fig. 8 贮藏穴出土遗物实测图 2 (1/4, 1/3, 1/2)

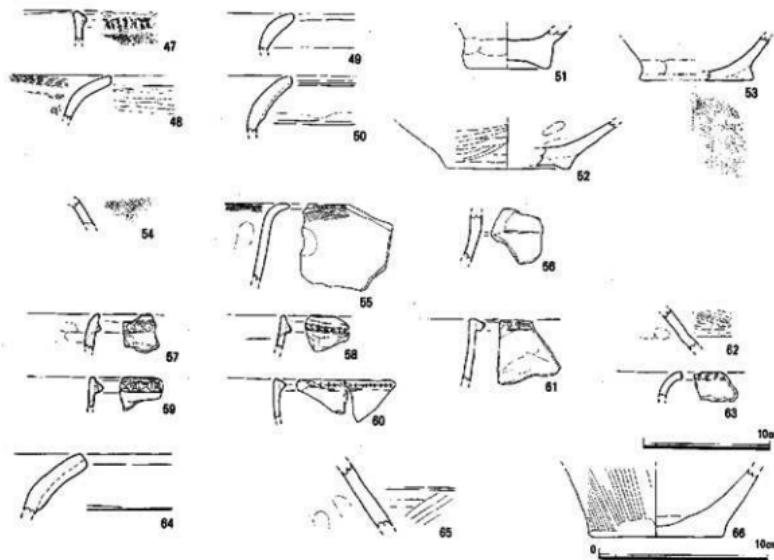


Fig. 9 貯蔵穴出土遺物実測図 3 (1/3, 1/4)

調査区中央に位置する。古墳時代の建物SB006に上面を切られる。平面形は長方形で、壁は若干袋状に立ち上がる。現存長234cm、幅148cm、深さ86cmを測る。埋土は黒色粘質土まじりのロームが凸レンズ状に互層に堆積する。遺物は弥生土器片が少量出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期に位置づけられる。

#### SU024 (Fig. 6)

調査区中央に位置する。平面形は円形で、壁は袋状に立ち上がる。径105cm、深さ62cmを測る。埋土は暗褐色粘質土が堆積する。遺物は刻目突帯文土器、弥生土器、黒曜石剥片等が出土した。

出土遺物 (Fig. 9-57~63) 57~61は刻目突帯文土器の深鉢である。57~59は口唇部からやや下がった所に突帯がつく。器面調整は擦痕である。60は口唇部に断面三角形の突帯がつく。刻目は浅い。61は口唇部に断面台形の突帯がつく。刻目は浅い。器面調整は擦痕である。62は小型の壺で、肩部に段がつく。63は如意形口縁の壺で、面取した口唇部全面にハケメ原体で刻目が施される。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期中頃に位置づけられる。

#### SU026 (Fig. 6)

調査区中央東側に位置する。中世末の溝SD002に上面を切られる。平面形は長方形で、壁は直立する。長さ120cm、幅78cm、深さ80cmを測る。埋土はロームブロックまじりの暗褐色粘質土が堆積する。遺物は少なく、弥生土器、黒曜石剥片等が出土した。

出土遺物 (Fig. 9-64~66) 64、65は大型の壺である。66は壺の底部である。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期中頃に位置づけられる。

#### SU028 (Fig. 6)

調査区南東に位置する。遺構の大半は削平され、遺存状態は良くない。平面形は長方形で、壁は

直立する。現存長50cm、幅90cm、深さ16cmを測る。埋土は暗褐色粘質土が堆積する。遺物は弥生土器片が少量出土した。

本貯藏穴は出土遺物から、弥生時代前期に位置づけられる。

## 2) 壺穴住居跡 (SC)

今回の調査では2軒の壺穴住居跡を検出した。1軒は調査区北東隅に位置し、第107次調査で検出された古墳時代後期のSC03で、住居跡のコーナー部分を検出した。南北長4.0m、東西長3.5mを測る。もう1軒は調査区南西隅に位置するSC013で、この住居跡は九州大学の第2次調査で、一部調査されている。重複する部分もあるがここに記述する。

### SC013 (Fig. 10)

調査区南西隅に位置し、SD001に切られる。遺構の大半が削平されているが、平面形は長方形を呈すると考えられる。床面には幅85cm、高さ15cmのベッド状遺構がある。深さ30cmが残存する。支柱穴は不明である。遺物は埋土から弥生土器、土師器が出土した。時期は古墳時代前期に位置づけられる。

出土遺物 (Fig. 10-67~69) 67、68はくの字形口縁の甕である。体部は長胴と考えられる。69は高壺である。壺部は接合部で欠損している。脚部は棒状を呈する。器面には綫方向のミガキが施される。

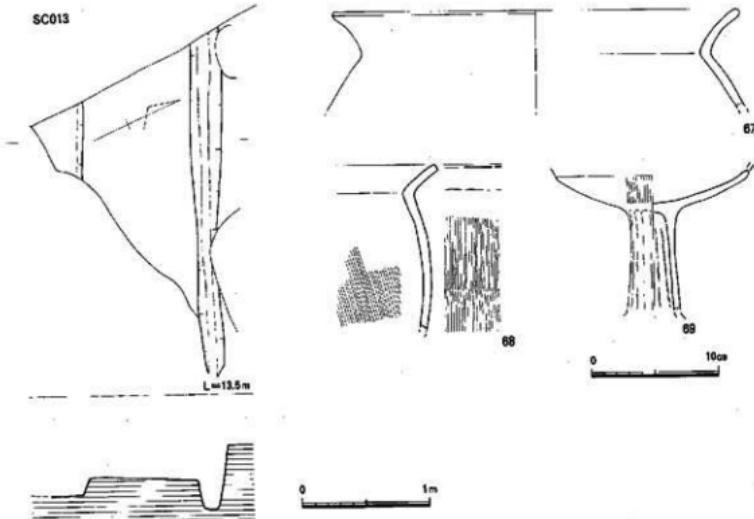


Fig. 10 SC013遺物実測図及び出土遺物実測図 (1/40, 1/4)

### 3) 構 (SA)、掘立柱建物跡 (SB)

今回の調査では200余りの柱穴を検出した。柱穴は調査区全域に分布する。そのうち、建物として復元できたのは7棟(SA003、SB005~009、029)である。柱穴からは初期須恵器、陶質土器が多く、出土したが、大半が混入と考えられ、建物の時期を直接示すものではないと考えられる。

#### SA003 (Fig. 11)

調査区西側に位置し、N-19°-Eの方位で南北方向に延び、東側に折れて、SB005、006を囲むものと考えられる。建物との間隔は2.6~3.0mを測る。柱穴は1辺0.3~0.6mの隅丸長方形で、今回の調査では南北8間分、延長13.5m、東西7間分、延長12mにわたって検出した。第107次調査で検出されたSA02に方位、規模が類似しており、これらは一連の区画の構と考えられる。柱間は1.8m~2.0mを測る。柱痕跡から推測される柱の径は20cmである。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、黒曜石剥片等が出土した。

出土遺物 (Fig. 14-70) 70はP9から出土した須恵器器台である。脚部の裾にあたり、突線に挟まれた文様体には描書きの波状文を施す。

#### SB005 (Fig. 11)

調査区西側に位置し、主軸方位はN-22°-Eを測る。南側をSD002に切られる。SB005は3×4間の総柱の南北棟である。柱穴は1辺0.6~0.9mの隅丸方形プランで、深さ0.2~0.4mが残存する。柱間は梁行で3.9m、桁行で5.4m、SB006との間隔は約2mを測る。床面積約21m<sup>2</sup>を測る。柱痕跡から推測される柱の径は約20cmである。柱穴の底の柱が据わっていた部分は若干沈み込んでいるものもある。遺物は弥生土器、古式土師器、須恵器、黒曜石剥片等が出土した。

出土遺物 (Fig. 14-71~73) 71、72はP3の掘り方から、73はP2から出土した須恵器である。71は壊蓋で、口縁と天井部の境に明瞭な稜を持つ。天井部の1/2以上に回転ヘラケズリが施される。口径12.6cmを測る。72は壊身で、口縁は欠損している。浅い壊身で、底部の1/2以上に回転ヘラケズリが施される。73は高壊の脚部で、長方形の透かし孔が施される。外面にはカキメが施される。底径8cmを測る。

#### SB006 (Fig. 11)

調査区西側に位置し、主軸方位はN-22°-Eを測る。北側をSD002、SK010に切られる。削平で柱穴が遺存していないものもあるが、SB005同様は3×4間の総柱の南北棟である。柱穴は1辺0.6~0.9mの隅丸方形プランで、深さ0.2~0.3mが残存する。柱間は梁行で3.9m、桁行で5.4m、床面積約21m<sup>2</sup>を測る。柱痕跡から推測される柱の径は約20cmである。柱穴の底の柱が据わっていた部分は若干沈み込んでいるものもある。遺物は弥生土器、古式土師器、須恵器、黒曜石剥片等が出土した。

出土遺物 (Fig. 14-74~77) 74はP2掘り方、75、77はP7掘り方、76はP3掘り方から出土した須恵器である。74は壊蓋で、口縁と天井部の境に明瞭な稜がつく。口径14.0cmを測る。75は壊身で、口縁の立ち上がりは高く、底部の1/2以上に回転ヘラケズリが施される。口径11.2cmを測る。76は高壊の壊部である。口縁は緩やかに外反する。色調は灰白色を呈する。口径11.8cmを測る。陶質土器と考えられる。77は壊の頭部である。2条の突線の間に体部との境に描書きの波状文が施される。

SA003、SB005、006は規模、方位等から同時期の建物と考えられる。調査区が狭いため、規模、構造は不明確な部分が多いが、SB005、006は3×4間の総柱建物で、規模は梁行長3.9m、桁行長5.4m、床面積約21m<sup>2</sup>と復元できる。SA003を第107次調査のSA02と一連のものと想定すれば、南

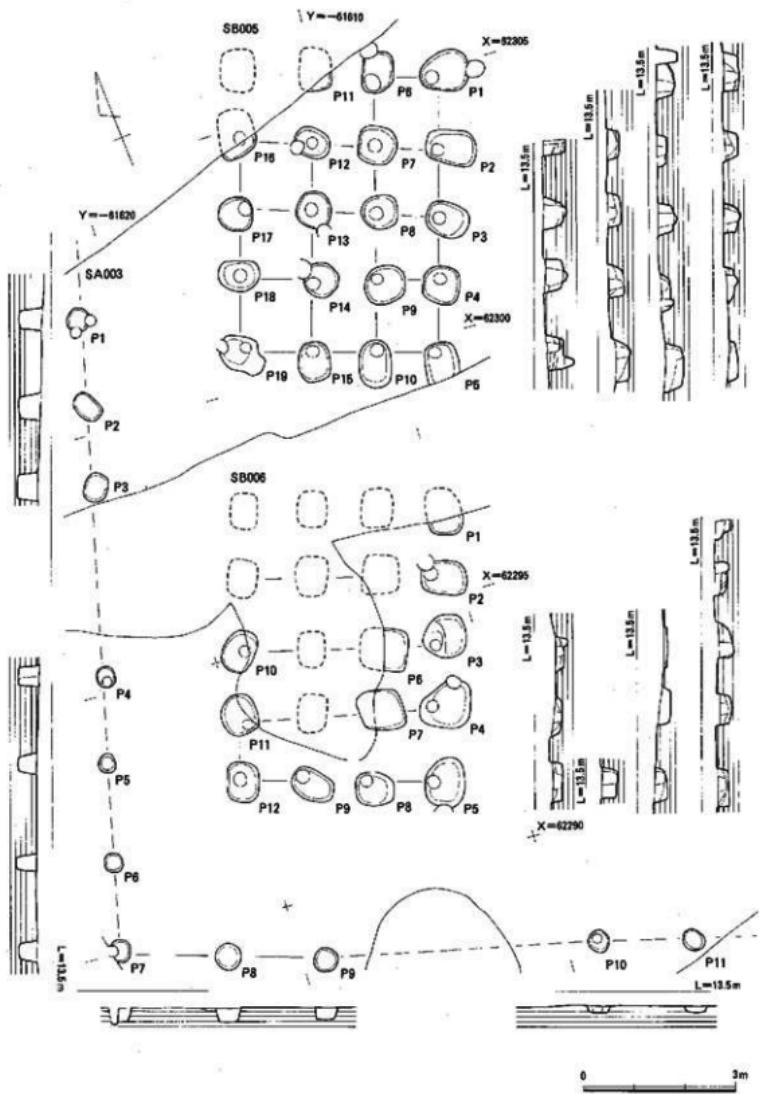


Fig. 11 SA003, SB005, 006構造実測図 (1/100)

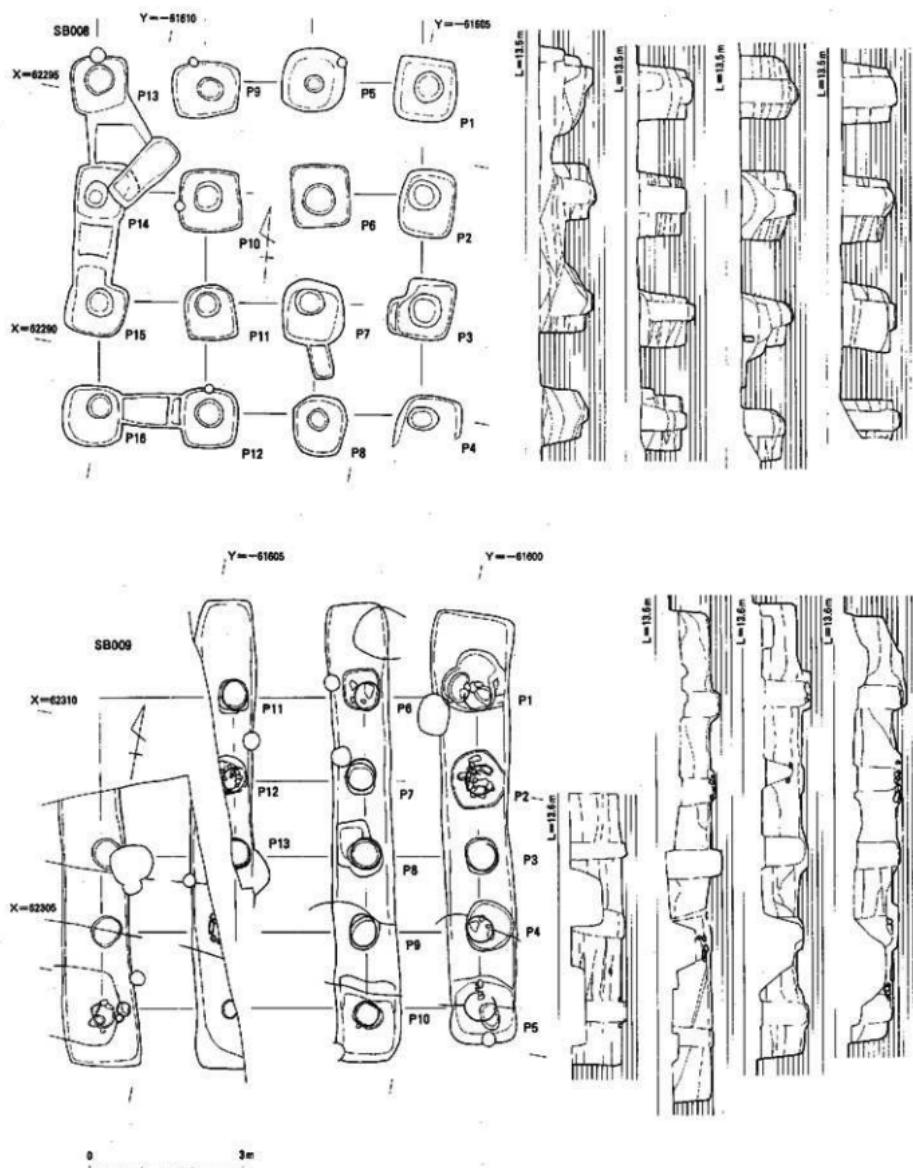


Fig. 12 SB008、009造構実測図 (1/100)

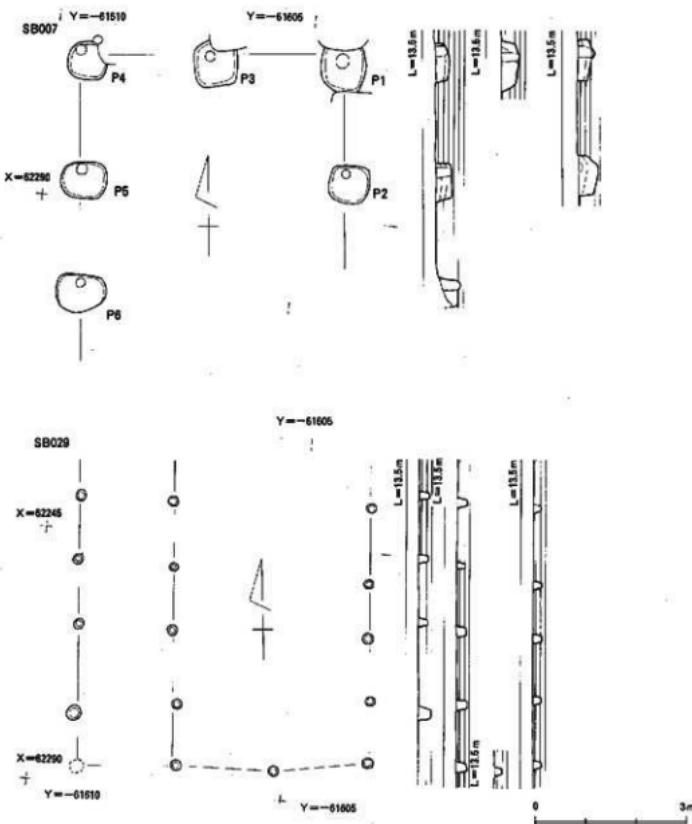


Fig. 13 SB007、029遺物実測図(1/100)

北長34m、東西長37m以上の規模の区画が復元できる。柱穴の出土須恵器は5世紀代のものが大半で、前代の遺構の混入と考えられる。建物の上限を示すものであろう。下限の時期は明確な切り合せ等が無いため、不明確だが、建物にはその後の建て替え等は認められず、長期にわたるものではなかったものと考える。

#### SB008 (Fig. 12)

調査区東側に位置する。柱筋はSB009と一致し、主軸方位はN-5°-Wを測る。北側をSD002に切られるが、3×4間の総柱の南北棟と考えられる。柱穴は1辺1.0~1.2mの隅丸長方形プランで、深さ0.9~1.2mが残存する。柱間は梁行で6.3m、桁行は4間とするとき8.8mで、床面積約55m<sup>2</sup>と推定される。柱は柱穴を据えた後、版築状に埋めている。柱は抜き取られたものが多く、柱穴P7、P12~16は抜き取りのための掘り込みが見られる。柱痕跡から推測される柱の径は30~40cmである。柱穴の底の柱が据わっていた部分は沈み込んでいる。遺物は弥生土器、古式土師器、須恵器、黒曜石剝

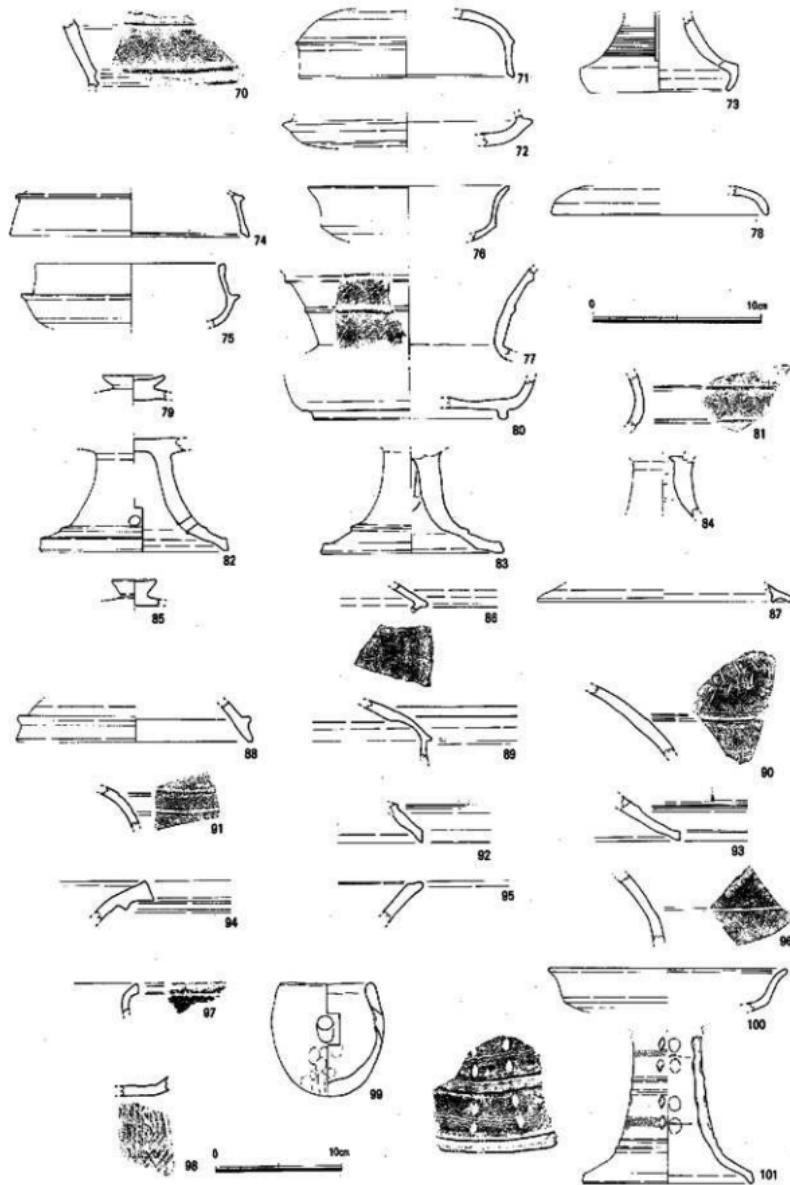


Fig. 14 掘立柱建物出土実測図 (1/3、1/4)

片等が出土した。

時期は出土遺物から奈良時代前半に位置づけられると考える。

出土遺物 (Fig. 12-79~100) 79~96、100は須恵器である。79~84は柱痕、それ以外は掘り方から出土した。79は坏蓋である。天井部に中央が窪んだ収みがつく。P6出土。80は坏身である。底部のやや内側に高台がつく。底径11.4cmを測る。P8出土。81は壺の体部と考えられる。二条の突線に挟まれた文様帯に描きの波状文が施される。P4出土。82、83、84は高坏の脚部である。82、83は裾部に一条の突線が巡る。82は突線の上位に円形の透かし孔が施される。端部は面取りする。底径11.0cm、10.8cmを測る。P2、P7、P12出土。85~90は坏蓋で、85は天井部に中央が窪む収みがつく。P14出土。86、87は口縁内側に短いかえりがつく。P4、P8出土。88は口縁外面に一条の突帯が巡る。89、90は天井部に拂原体による刺突文を施す。91は壺である。二条の沈線の間に描きの波状文を施す。P14の抜き穴出土。92、93は高坏脚部で、裾部に一条の突線が巡る。突線の上位に透かし孔が施される。P13、P9出土。94は壺口縁である。口縁下には一条の突帯が巡る。P8出土。95は壺口縁と考えられる。端部は窪みを持つ。P14出土。96は壺胴部と考えられる。内外面とも叩き目をナデ消す。外面には沈線が巡る。P6出土。97、98は軟質土器の壺である。外面に平行叩きが施される。P14出土。99は上師器の壺蓋である。体部上位に焼成前の穿孔が施される。器高9.0cm、口径7.4cmを測る。P7出土。100は高坏の坏部である。口縁は緩やかに外反する。陶質土器の可能性がある。口径14.2cmを測る。P10出土。後述する101の高坏と同一個体の可能性がある。

#### SB009 (Fig. 12)

調査区北東側に位置する。第107次調査で検出されたSB009の残りの部分である。遺構はSD004に切られ、更に北側に広がる。柱筋はSB008と一致し、主軸方位はN-4°-Wを測る。3×4間の総柱の東西棟である。柱掘り方は幅1.3m、長さ約9mの布掘りで、深さ0.8~1.0mが残存する。柱間は梁行で6.2m、桁行で7.4m、床面積は約46m<sup>2</sup>を測る。柱は掘り方に据えた後、版築状に埋めている。柱は抜き取られたものが多いが、柱痕跡から推測される柱の径は30~40cmである。柱穴の底の柱が据わっていた部分は沈み込んでいる。根固めの石が据えられたものもある。遺物は弥生土器、古式土師器、須恵器、黒曜石剥片等が出土した。

時期は出土遺物等から奈良時代前半に位置づけられると考える。

出土遺物 (Fig. 14-101) 101は高坏脚部である。外面には二条の突線と描きの波状文が巡る。施文後、菱形の刺突文が継ぎに施される。刺突文は貫通しない。底径10cmを測る。

#### SB007 (Fig. 13)

調査区東側に位置する。SB008に切られ、南側は削平されており、桁行は不明である。主軸方位はN-0°-Wを測る。柱穴は6個、2×3間分を検出した。柱穴は1辺0.6~0.9mの隅九長方形プランで、深さ0.3~0.4mが残存する。柱間は梁行で5.2m、桁行で4.6m以上を測る。柱は柱穴に据えた後、版築状に埋めている。柱痕跡から推測される柱の径は20cmである。柱穴の底の柱が据わっていた部分は沈み込んでいるものもある。遺物は弥生土器、古式土師器、須恵器、黒曜石剥片等が出土した。

時期は切り合ひ等から奈良時代前半以前に位置づけられると考える。

出土遺物 (Fig. 14-78) 78は坏蓋である。天井部は欠損している。口径13cmを測る。P6出土。

#### SB029 (Fig. 13)

調査区東側に位置する。SD002に切られ、SB008を切る。主軸方位はN-3°-Eを測る。SB029は2×5間以上の南北棟で、西側に庇が取り付く。柱穴は径0.2~0.3mの円形プランで、深さ0.2~0.3mが残存する。柱間は梁行で3.9m、桁行で5.1m以上を測る。柱穴の埋土は暗灰色粘質土である。遺物は弥生土器、古式土師器、須恵器、黒曜石剥片等が出土した。時期は中世に位置づけられると考える。

#### 4) 溝 (SD)

今回の調査では3条の溝を検出した。

##### SD002 (Fig. 15)

調査区中央に位置する東西溝である。SD001を切る。第107次調査で溝の延長は検出されている。今回の調査では27m分を検出した。SD002はN-87°-Wの方位で直線的に延びる。幅約2~3m、深さ1.4m、溝の底の幅は約0.4mを測り、断面形はV字形を呈する。遺物は少なく、弥生土器、土師器等が出土した。

時期は前回の調査成果から中世末に位置づけられる。

##### SD001 (Fig. 15)

調査区西側に位置する南北溝である。この溝の一部は第2次調査で掘り下げられている。今回の調査では18m分を検出した。SD001はN-6°-Wの方位で直線的に延びる。幅約0.9~1.0m、深さ0.6m、溝の底の幅は約0.6mを測り、断面形は逆台形を呈する。遺物は少なく、弥生土器、土師器、須恵器等が出土した。

時期は出土遺物が少なく、決め難いが、古墳時代後期から奈良時代に位置づけられる。

##### SD004 (Fig. 15)

調査区北側に位置する東西溝である。SB009を切る。第107次調査で溝の延長は検出されている。今回の調査では10m分を検出した。SD004はN-85°-Wの方位で直線的に延びる。幅約1.1~1.2m、深さ0.6m、溝の底の幅は約0.6mを測り、断面形は逆台形を呈する。遺物は少なく、弥生土器、土師器、須恵器等が出土した。

**出土遺物 (Fig. 15-102~106)** 図示した遺物は混入で、造構の時期を示すものではない。102は外面に平行叩きが施された壺で、軟質土器と考えられる。口径23.6cmを測る。103~106は須恵器である。103は壺身である。口径10.6cmを測る。104は高壺脚部で、外面にカキメが施され、長方形の透かしが穿たれる。105は壺で、口縁下に突帯がつく。106は器台の壺部と考えられる。器面に波状文が施される。

時期は出土遺物が少なく、これまでの調査成果から奈良時代に位置づけられる。

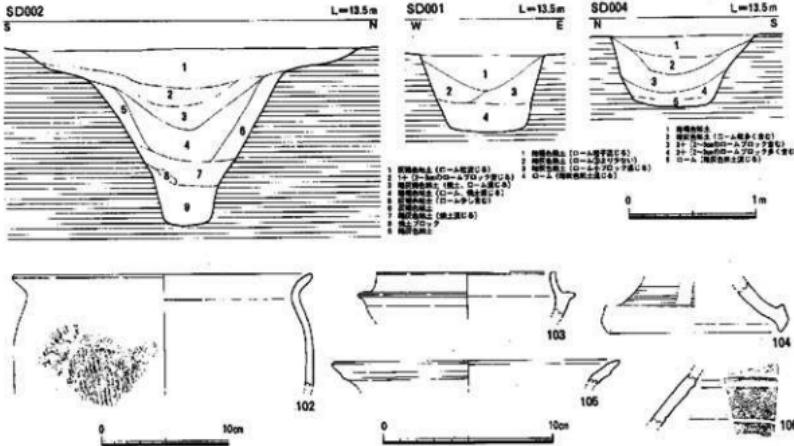


Fig. 15 SD001, 002, 004土層実測図及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3, 1/4)

## 5) 土坑 (SK)、井戸 (SE)

今回の調査では4基の土坑、1基の井戸を検出した。

### SK010 (Fig. 16)

調査区中央に位置し、SB006を切り、SD002に切られる。平面形は不整楕円形を呈し、長さ3.6m、幅2.8m、深さ0.4mを測る。埋土は灰褐色粘質土となる。遺物は埋土から弥生土器、土師器、輸入陶磁器等が出土した。

出土遺物 (Fig. 16-107~109) 107は土師器壺である。底部の切り離しは糸切りである。器高2.2cm、口径12.2cmを測る。器壁は薄く、色調は灰白色を呈する。108は白磁の高台付皿である。109は明染付けの皿である。110は瓦質土器の火舎である。外面に菊花文が押印される。

遺構の時期は出土遺物から中世末と考えられる。

### SK012 (Fig. 16)

012は調査区東側に位置し、SB008に切られる。遺構は二段に掘り下げられ、平面形は長方形を呈し、残存長0.9m、幅1.2m、深さ0.2mを測る。遺物は埋土から土師器、須恵器等が出土した。

出土遺物 (Fig. 16-111~115) 111は須恵器壺身である。口縁は欠損している。底部の1/2に回転ヘラケズリが施される。112は軟質土器の壺である。口縁は緩やかに外反し、端部は摘み上げる。底部は平底である。体部から底部にかけて平行叩きが施される。器高12.6cm、口径12.6cm、底径7.0cmを測る。113、114は土師器高壺である。壺部は接合部に明瞭な棱をもつ。脚部は裾部で強く屈曲する。115は土師器丸底壺である。口縁は緩やかに外反する。口径11.0cmを測る。

遺構の時期は5世紀代に位置づけられる。

### SK014 (Fig. 16)

調査区南西側に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径1.2m、短径0.9m、深さ0.3mを測る。埋土は灰褐色粘質土となる。遺物は埋土から土師器、瓦器、輸入陶磁器等が出土した。

出土遺物 (Fig. 17-116~121) 116は土師器小皿である。底部の切り離しは糸切りである。器高1.0cm、口径9.8cmを測る。117は土師器壺である。底部の切り離しは糸切りである。器高2.6cm、口径16.2cmを測る。118は在地産の瓦器碗である。底部には断面台形の高台がつく。119、120は白磁碗である。121は中国製の陶器の鉢である。口径21.8cmを測る。

遺構の時期は12世紀後半から13世紀に位置づけられる。

### SK025 (Fig. 16)

調査区東側に位置し、SB009を切る。平面形は長方形を呈し、長さ2.8m、幅1.4m、深さ0.25mを測る。埋土は暗灰褐色粘質土となる。遺物は埋土から土師器等が出土した。

遺構の時期は出土遺物が少ないため、決め難いが、中世期に位置づけられるものと考えられる。

### SE015-016

調査区南西隅に位置する。井戸は人為的に埋め戻されている。遺構の深さは3mを超えたことと調査期間の関係で、完掘に至っていない。遺物は井戸側部分から出土したものである。

出土遺物 (Fig. 17-121~139) 121は在地産の瓦器碗である。底部には断面台形の高台がつく。体部の下半に指揮えの痕跡が見られる。122~126は白磁碗である。123は見込みに櫛描文が施される。127は同安窯系青磁の碗である。底部は欠損している。128~132は龍泉窯系青磁の碗である。128は無文で、129~132は体部内面と見込みに草花文が施される。134、135は龍泉窯系青磁小皿で、見込みに双魚文が施される。136は見込みに櫛描文が施される。136は同安窯系青磁小皿で、見込

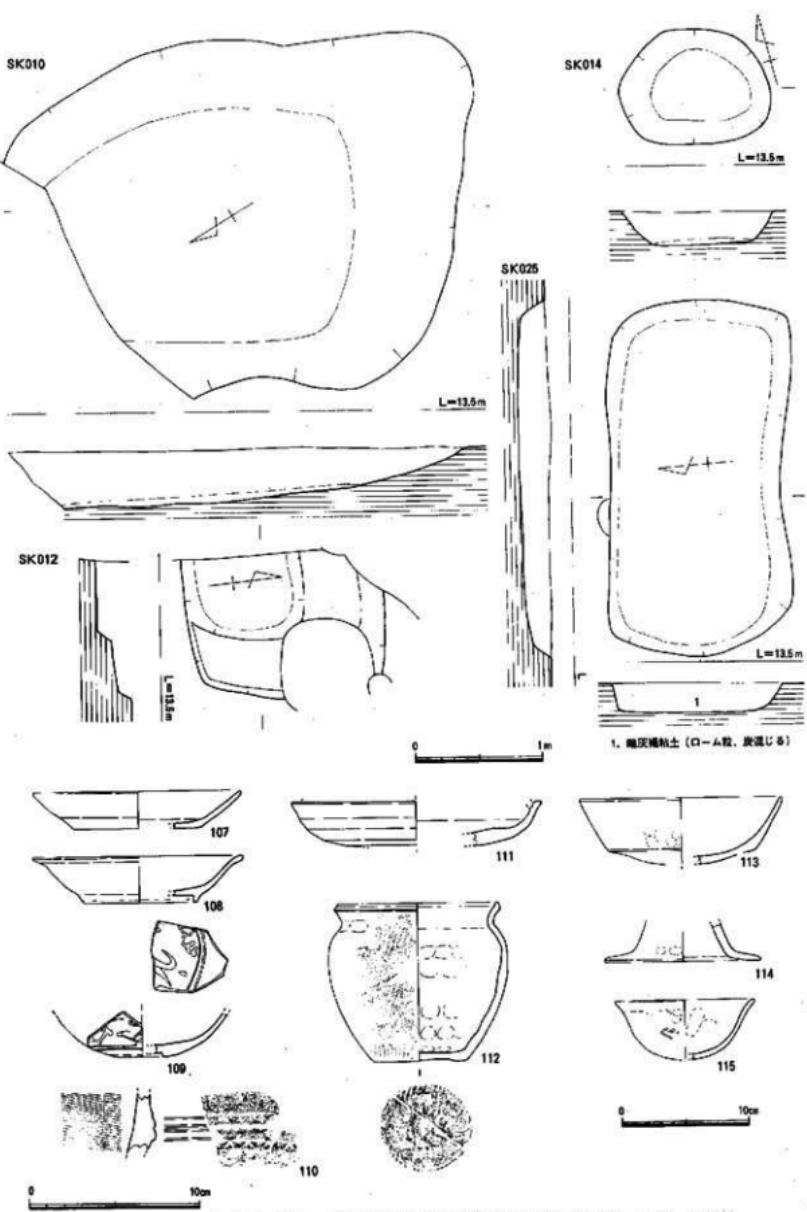


Fig. 16 SK010、012、014、025遺構実測図及び遺物実測図 (1/40、1/3、1/4)

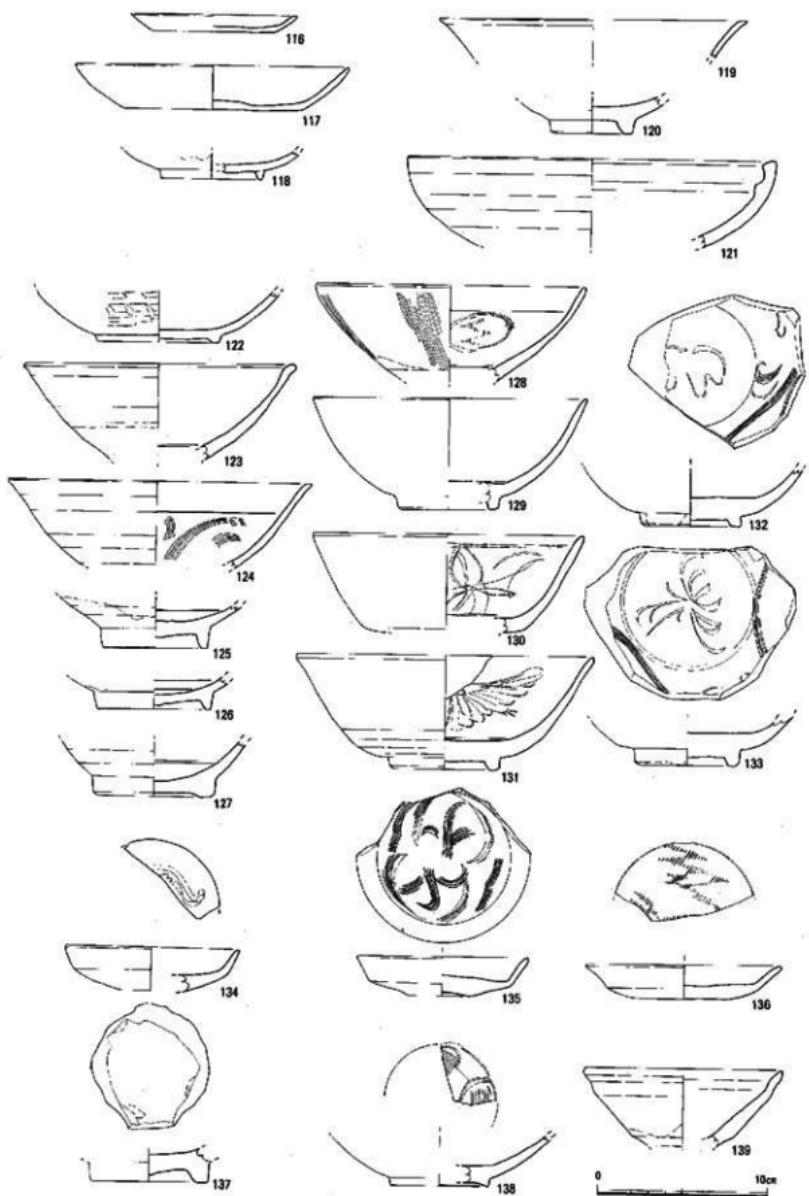


Fig. 17 土坑及び井戸出土遺物実測図 (1/3)

みに掛け文のジグザグの文様が施される。137は高麗青磁の碗である。釉は全面にかけられ、釉色は深緑色を呈する。見込みには目跡が残る。138は青白磁の碗である。見込みには掛け文が施される。足付きから内側は露胎である。釉色は水色を呈する。139は中国産天目碗である。

遺構の時期は出土遺物から12世紀後半～13世紀に位置づけられる。

#### 6) その他の出土遺物 (Fig. 18-140～150)

ここでは柱穴や溝から出土した遺物で、特筆すべきものについて図示した。

140～146は柱穴から夜臼式土器の深鉢である。140は小片のため、傾きに不安があるが、波状口縁を呈する可能性がある。図示した深鉢の突帯は口縁端部につき、刻日は小さく浅いものが大半である。147はSU028から出土した混入の須恵器坏身である。口縁の立ち上がりは高く、体部は深い。底部の2/3に回転ヘラケズリが施される。口径10.2cmを測る。148はSB007から出土した玄武岩製の磨製石斧である。刃部は欠損している。残存長13.6cm、幅7.2cm、厚さ3.8cmを測る。149はP 4から出土した臼である。欠損しているが、臼の下部にあたる。石材は凝灰岩である。150はSB007から出土した碧玉製の管玉である。長さ2.9cm、径0.4cmを測る。

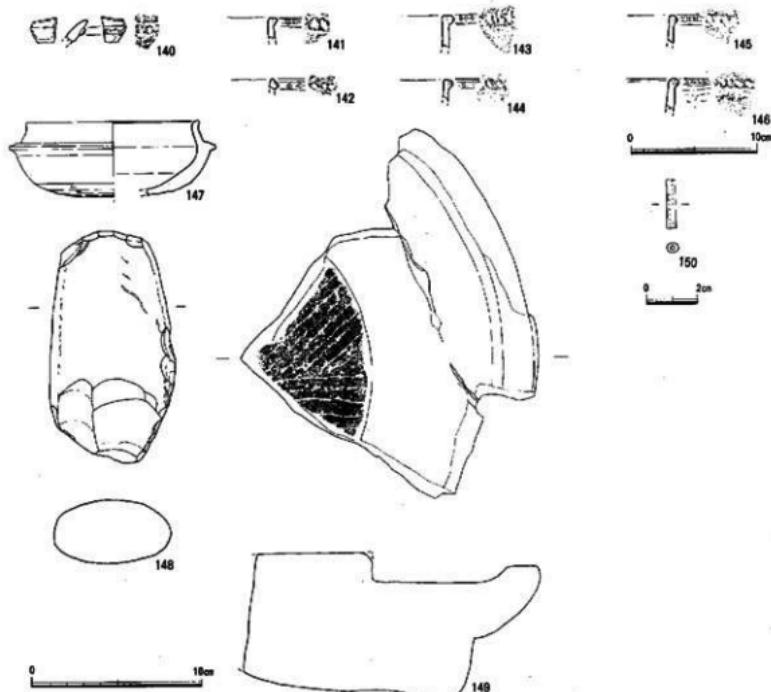


Fig. 18 柱穴出土遺物実測図 (1/2, 1/3, 1/4)

### 7) 有田181次調査出土の石器資料

1は004北トレンチ出土のナイフ形石器である。本来の包含層を遊離したものである。石器は先端と基部を調査時に欠損した。石材は黒灰色不透明の黒曜石であり、縞状の流理や微細なビンホールがみられ、表面のバティナは著しく、ざらついた感を受ける。佐世保市淀姫産であろうか。二次的な磨滅は認められない。縦長剥片の打点部を先端とし、二側辺にプランティングを施している。プランティングは両側共に急角である。右側辺は腹面の打撃部に潰れがみられ、右側辺は基部側に調整を施している。腹面に平坦剥離がみられるが、意図的なものかは不明である。本石器の現状での大きさは、長さ2.7cm、幅1.3cm、厚さ0.7cm、重量2.19gを測る。推定される本来の大きさは長さ約2cm前後であろう。形態から、後期旧石器段階中頃の所産と考えたい。

2は004トレンチ西側で出土した石鏃である。石材は漆黒色不透明の黒曜石であり、不純物を含まず、風化は弱い。二次的磨滅は認められない。肉眼では伊万里市腰岳産の黒曜石に類似する。石鏃は先端部を欠損している。形態、厚さ共に左右非対称である。調整剥離は荒く、各所に階段状剥離を生じている。本石器の現状での大きさは、長さ1.3cm、幅2.0cm、厚さ0.4cm、重量1.02gを測る。この石鏃は、形態や製作技術からみて弥生時代前期に所属するものであろう。

### 8) 有田・小田部遺跡の旧石器時代資料

さて、本調査地点は早良平野中央に位置する有田・小田部丘陵上に位置している。この丘陵はAso-4火砕流を基盤としており、上面が平坦で現在の標高は5~15mほどを測る。またこの丘陵は河川の浸食や雨水、湧水等の浸食で開拓され、八つ手状の平面観を呈する。

この丘陵の旧石器時代遺跡は、今回の資料を合わせると12地点において確認されることになる。なお、多くの遺跡は本地点と同様に弥生時代以降の開発により、本来の包含位置を離れて発見されている。ただし、6次、131次では当該期の包含層が確認されており、6次では市域内では希な集石遺構も発見されている。丘陵内の出土地点は他の遺跡と同様に浅い谷部や丘陵縁辺での出土が多い。しかし、本地点を含む6、10、54、107次周辺は丘陵中央にあって、比較的の近接して遺跡が集中している。付近では表面採集でも旧石器時代資料が知られている。6次の集石遺構と併せてみると、この付近は後期旧石器段階にベースキャンプとして長期間利用されていたと推定できる。

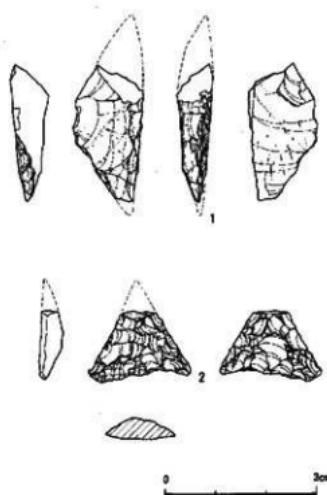


Fig. 19 有田181次出土石器実測図(1/1)

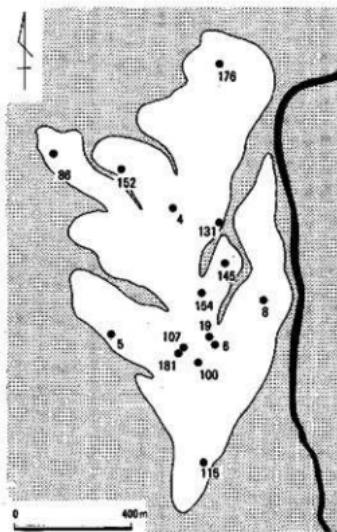


Fig. 20 有田・小田部台地の旧石器時代の遺跡

I期



II期



III期

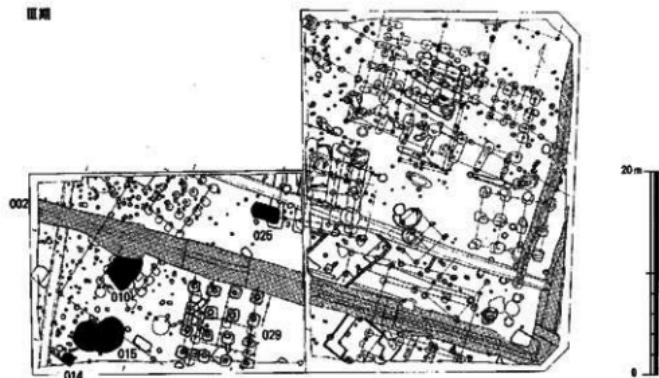


Fig. 21 有田遺跡群第181次調査地点遺構変遷図 (1/500)

#### 4. 小結

本調査地点は有田台地の最高所にあたり、周辺の調査も進んでいる。本調査でも旧石器時代の遺物や弥生時代前期から中世にわたる時期の遺構、遺物を数多く検出した。ここでは今回の調査成果を整理し、周辺の調査地点の成果とあわせて問題点について簡単に触れていただきたい。

##### 1) 遺構の時期的変遷

今回の調査で検出した遺構は大きく、Ⅰ期（弥生時代前期）、Ⅱ期（古墳時代後期から奈良時代）、Ⅲ期（中世）の3時期に分けられる。

Ⅰ期 この時期の遺構には貯蔵穴がある。貯蔵穴は10基検出した（SU011、018、019、020、021、022、023、024、026、028）。貯蔵穴は分布の状態から更に調査区外にも広がると考えられるが、東西の隣接地の第107次調査、第187次調査では検出されていない。従って、遺構の分布は南北に広がるものと考えられる。遺構の遺存状態はあまりよくないが、坑壁は袋状を呈するもの、直立するものがある。坑底の平面形は長方形プラン（SU018、019、020、022、023、026、028）、円形（SU011、024）、椿円形（SU021）がある。床面に柱穴等を持つものは見られなかった。埋土は貯蔵穴として使用しなくなった後に流れ込んだ暗褐色系の粘質土がレンズ状に堆積するものが多いが、中には使用後すぐに地山の鳥栖ロームで埋め戻しているものもある。貯蔵穴は調査区全域に分布するが、切り合いは見られない。長方形プランのものは主軸方位を東西にとるものと南北にとるものがある。遺物は土器（刻目突帯文土器、弥生土器の甕、壺、鉢、高杯）、石器（磨製石斧、石包丁、磨製石鎌、黒曜石原石等）が出土した。土器の出土状態はほとんど廃棄されたもの、もじくは流れ込んだもので、坑底に据えられていた状態のものはない。出土量も少なく、SU011、SU020を除けば、大半が小片のみである。各遺構とも刻目突帯文土器が出土しているが、大半が突帯は口縁端部につき、刻目は細かく浅いことから、夜臼式以降のものと考える。遺構の時期は概ね、弥生時代前期前半（板付Ⅰ式）から中頃（板付Ⅱa式）におさまるものと考えられる。また、後世の遺構等に混入して刻目突帯文土器が若干出土しており、削平された遺構も存在した可能性がある。

当該地は夜臼式期から板付Ⅰ式期の環濠の内側にある。環濠はこれまで、北東側を第2次、87次調査で、北側を第18次、56次、133次調査で、西側を第95次調査で、南側を第54次調査で確認している。それらから復元される環濠は平面椿円形を呈し、規模は南北300m、東西200mを測る。更に第133次の南側の下水道工事に関する調査では環濠が途切れていることが確認され、そこに陸橋部があったと推測されている。環濠の掘削時期を夜臼式単純期とするか、板付Ⅰ式期とするかはまだ結論が出ていないが、板付Ⅰ式期以降、掘り直されることなく埋没していったことは確かである。しかし、埋没期と並行して新たな環濠も掘削されているようである。環濠の北東に位置する第6次調査では板付Ⅱa式期の溝が検出され、その東側にある7次調査地点にその延長と見られる溝があり、径75m以上の環濠が想定されている。それ以外にも第6次調査地点の西側、第96次調査地点、第134次調査地点等で該期の溝が検出され、台地の数カ所に環濠が存在したと推測されている。

環濠の内側では該期の遺構の検出例は少ないが、今回検出した貯蔵穴群は環濠の存続期の遺構と考えられる。本調査区の南側にある第78次調査では板付Ⅰ式～Ⅱ式期の松葉里型の堅穴住居跡、貯蔵穴が検出されている。その東隣接地の第100次調査地点でも板付Ⅱ式の堅穴住居跡、貯蔵穴が検出されており、居住域の一つと考えられる。それ以外では環濠の外側にあたる位置で、第3次調査

地点や第66次調査地点等で板付II式の貯蔵穴の検出例がある。また、遺跡群の北西隅の八手状に延びる小丘陵にある第35次、86次、121次、177次調査地点では板付II式以降の竪穴住居跡、貯蔵穴、甕棺墓等が検出されており、集落の北側への分散が見られる。

今回検出した貯蔵穴群は夜臼式期から板付I式期の環濠の陸橋部から南東約25mに位置する。この貯蔵穴群は隣接地の調査成果によると、東西30m、南北20m程の範囲に集中する。竪穴住居跡等が削平された可能性もあるが、環濠の出入り口近くに配置された貯蔵穴が群集する貯蔵領域の一つと考えたい。本調査地点の南側の第78次、100次調査地点でも貯蔵穴が検出されているが、竪穴住居跡に伴うもので、本調査地点の在り方と異なるものと考える。環濠内に居住域と貯蔵域といった領域の区分があったと想定される。このような在り方は板付遺跡の環濠でも見ることができる。板付遺跡は南北110m、東西80mの環濠の南西部に陸橋がつき、その北側約30mに弦状溝で区画された貯蔵穴群がある。板付遺跡では環濠内の住居跡は検出されていないが、貯蔵域が溝によって明確に区画されていることが分かる。板付遺跡の北西に位置する比恵遺跡でも台地の北側を中心に弥生時代前期の集落遺構が検出されているが、このように竪穴住居跡と数基の貯蔵穴からなる居住域と貯蔵穴のみが群集する貯蔵域が見られる。初期段階の弥生集落における空間利用の在り方として注目したい。近年、早良平野では藤崎遺跡群、田村遺跡群、重留遺跡群、東入部遺跡群等で、夜臼式期から板付I式期前後の竪穴住居跡、甕棺墓の検出例も増えてきており、それらの成果や今後の調査で加わる新たな知見をもとに比較検討していきたい。

II期 この時期の掘立柱建物(SB005~009)、構(SA003)、溝(SD001、004)等がある。調査区が狭いため、規模、構造は不明確な部分が多いが、これらは切り合いや方位等から4つの小期に分けられる。

1小期の遺構はSA003、SB005、006である。SB005、006は主軸方位N-22°-Eの3×4間の総柱建物で、規模は梁行長3.9m、桁行長5.4m、床面積約21m<sup>2</sup>と復元できる。SA003は若干軸が振れるか、SB005、006を囲む構と考える。

2小期はSB008に切られる建物のSB007で、磁北方位の2×3間以上の掘立柱建物である。

3小期はSB008、009、SD002である。SB008は一部削平をうけているが、主軸方位N-5°-Wの3×4間の総柱建物と考えられ、梁行で6.3m、桁行は4間とすると8.8mとなり、床面積約55m<sup>2</sup>と復元される。SB009は東側隣接地の第107次調査から続くN-4°-Wの3×4間の総柱建物で、柱の掘り方は布掘りである。梁行で6.2m、桁行で7.4m、床面積は約46m<sup>2</sup>を測る。SD002はN-6°-Wの南北溝で、建物の西側に位置する。西側隣接地で行われた第187次調査ではこの時期の建物は検出されておらず、建物群の西端を画する溝と考えられる。

4小期はSB009を切る溝SD004で、第107次調査地点から延びる東西溝である。

以上が、II期の遺構であるが、これらについては次の項でこれまでの調査成果とあわせて、建物の構造や時期的変遷を見ていきたい。

III期 この時期の遺構には溝(SD002)、井戸(SE015、016)、土坑(SK010、014、025)、掘立柱建物(SB029)等がある。SD002は16世紀代に位置づけられ、有田台地上に見られる曲輪状遺構の一部である。幅約2~3m、深さ1.4m、溝の底の幅は約0.4mを測る。この溝は東側隣接地の第107次調査地点から直線的に延びてきて、更に西側に延びる。SE015、016からは多量の輸入陶器が出土した。遺物から12世紀後半~13世紀に位置づけられる。SK014も同時期と考えられる。SB029はSB008を切り、SD002に切られる2×5間以上の南北棟で、西側に庇が取り付く。埋土の状況から中世に位置づけられたが、遺構の時期は明確でない。東側隣接地の第107次や南側の第100次調査地点では中世の建物が数多く検出されているが、濠との関連も含めて検討が必要であろう。

## 2) 古墳時代後期から奈良時代の建物群の変遷

有田遺跡群では古墳時代後期から奈良時代にかけて柵や溝に区画された建物群が各所に見られる。その中でも本調査地点は台地の最高所にあたり、特にそれらの建物群が多く見られる場所である。東側隣接地の第107次調査検出建物群の変遷については山崎龍雄氏や米倉秀紀氏によって分析されて、大きく4時期に分けられている。先に触れたⅡ期の4小期に分けた建物群も第107次調査の4つの各時期に対応するものと考えられる。ここでは有田遺跡の該期の建物群をA~D群の4群に分けた米倉氏の分類に従い、東側隣接地の第107次調査地点の成果とあわせて建物群の変遷を見ていきたい。

A群建物 第107次SA02、SA04、第181次SA003、SB005、006が相当する。SB005、006はSA003に区画されるが、柵は北側に延びてSA02に達すると考えられる。東側の延長は明確でないが、柵による区画は南北長34m、東西長37m以上の規模が復元できる。SB005の北側に更に縦柱建物が並ぶ可能性はあるが、区画の中央部は空白地であったと考えられる。建物はいずれも3×4間で、床面積約21m<sup>2</sup>を測る。SA04の延長は確認されていないが、周辺の調査成果によると、SA02、SA003による区画の外側を巡る可能性は少ない。北側に折れて、同様の区画が存在したのではないかと考える。同様の柵は本調査地点西側の第133次、第146次、第158次調査で確認されている。第158次調査地点ではこの柵を切るB群の3本柱の構状遺構が検出されており、第107次調査の成果とあわせて、1本の柵から3本の柵状遺構への変遷が追えるのではないかと考えられる。

B群建物 第107次SA01、03、SB03、05、第181次SB007が相当する。第107次SA01、03は3本の柱からなる柵状遺構である。両者とも隣接地の調査で延長が確認されており、SA01は北側に、SA03は南側に折れる。SA01の区画の範囲は内側の規模で、南北約33m、東西約45m、SB03は南北約33mを測る。SA01の区画は南側に2棟、北側に2棟縦柱建物が確認されている。南側の建物SB03、05は2×3間の縦柱建物で、床面積13.7m<sup>2</sup>、17.4m<sup>2</sup>を測る。SB07はこれらの区画の外側に位置する。主軸方位からこの時期の建物と考えられるが、規模、構造に不明な点が多く、区画との関係は保留しておきたい。これらの区画は規模や方位等から併設して存在したと考えられる。先のA群の柵による区画も南北に併設した可能性があり、また、柵の区画の規模も類似しており、A群からB群建物の連続性を伺うことができる。

3本柱の柵状遺構は北から第35次・36次・46次・64次・86次・121次・177次調査地点、第102次調査地点、第105次調査地点、第30次・53次・75次調査地点、第6次・66次調査地点、第158次調査地点で検出され、内部に1~2棟の縦柱建物が確認されている。これらの遺構は方位、規模は異なり、台地全体に及ぶ企画をもとに造営されたものではないと考えられるが、第35次・36次・46次・64次・86次・121次・177次調査地点や第6次・66次調査地点では第107次地点と同様に併設した状況が見られる。この併設の状況がどのような意味をもつものかは今のところ解釈を持ち得ないが、区画の規模や内部の建物配置等の確認が待たれる。

このような柵状遺構の類例は少ないが、博多区の比恵遺跡で数カ所検出されている。比恵遺跡では第8次調査で、東西方向の3本柱の柵状遺構に沿って並列する5棟の縦柱建物が検出されている。更に中央の空白地を挟んで南側にも主軸方位が他と異なる2棟の縦柱建物が検出されている。第39次調査地点では第8次調査地点とは方位が異なる柵状遺構と2棟の縦柱建物が検出されている。また、第7・13次調査地点では3本柱の柵状遺構に挟まれる形で、2×9間の東西棟が検出されている。ここでは区画の内部に縦柱建物を配置しない構造で、他の調査地点の建物群とは性格を異とするものと考えられる。



Fig. 22 有田遺跡群第107次、181次建物変遷図 (1/500)

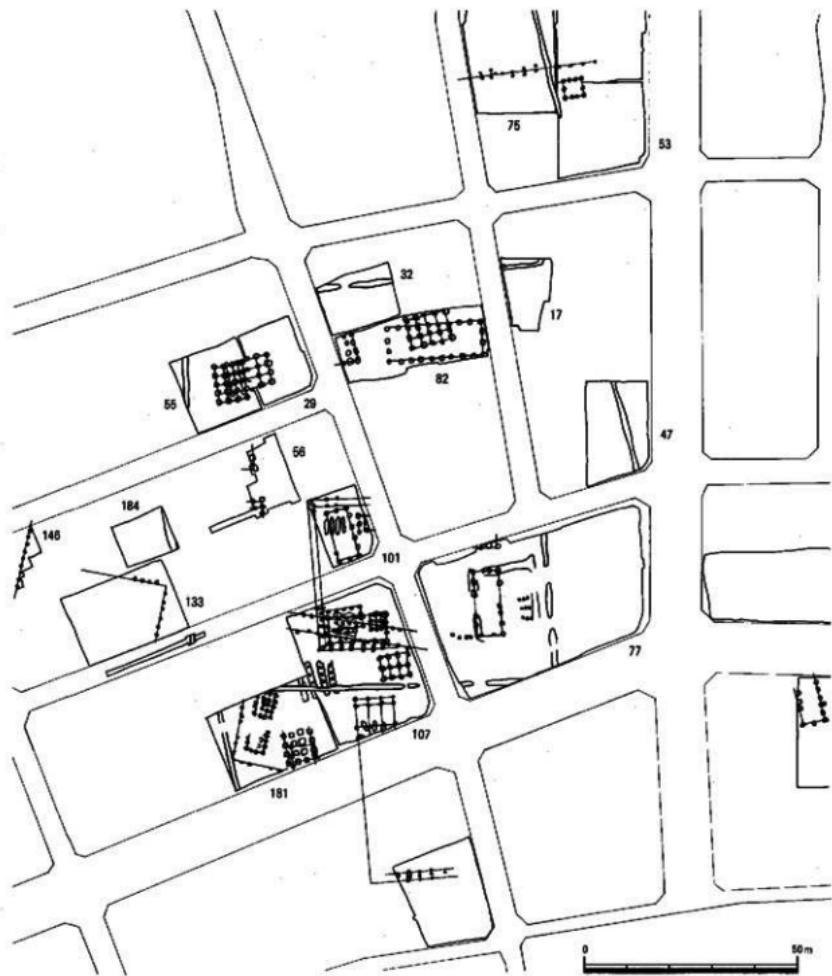


Fig. 23 有田遺跡群第107次、181次調査地点周辺建物分布 (1/1200)(米倉1993論文に加筆)

**C群建物** 第107次SB09、06、SB02、第181次SB08、SD001が相当する。第107次SB09、06、02は東西棟、第181次SB08は南北棟である。SB009は3×4間の布堀りの総柱建物で、床面積は約46m<sup>2</sup>を測る。SB006は3×4間の総柱建物で、床面積は約34m<sup>2</sup>を測る。SB002は3×5間の側柱建物で、床面積は約46.8m<sup>2</sup>を測る。SB008は3×4間の総柱建物と考えられ、床面積は約46m<sup>2</sup>と復元される。A群、B群の建物と比べると規模が大きいことが分かる。建物群の西側には南北溝SD002がある。この溝は北側に位置する第184次調査で延長が確認され、南北に70m以上延びることが分かった。この溝と平行する南北溝は第47次、第75次、第108次、第124次で確認されている。更にこの溝は第3次、第124次調査で検出された東西方向の大溝と直交する一連の南北溝と考えられる。この大溝の掘削の時期は明確でないが、平安時代初めには埋没していたと見られ、掘削の時期は8世紀代に遡ると考えられている。2本の南北溝の幅は約110mを測る。

現在検出されている溝の間の建物群を見ると、本調査地点の北側の第82次・32次・29次・55次調査地点で、東西方位の3×4間の柱筋をそろえた総柱建物が3棟検出されている。また、第55次調査地点で、その東西棟を切る南北方位の3×4間の総柱建物が1棟検出されている。第55次調査地点の南側の第56次調査地点でも同一方向の建物の一部が検出されており、第55次調査地点から続く、南北棟の配列が推測される。これらの建物群の北側では同様の建物は検出されておらず、北限と考えられる。南側についても第181次調査の南側では検出されておらず、建物群の分布はこの範囲に限られると推測される。その場合の南北の範囲は約100mとなり、東西、南北に1町の範囲に建物群が分布することになる。建物の構造を見ると、ほとんどが総柱建物で、高床倉庫と考えられる。建物がすべて同時期とは言えないが、未調査区を含めて、9棟以上の総柱建物が存在したと考えられる。また、第107次SB02の側柱建物に関しては正税帳等に記載されている、土間なしし低床構造の収納施設である「屋」と考えられる。正税帳に記載されている「正倉」の内訳では「屋」の割合は7%程度があり、本遺跡の状況はそれに近似する。米倉秀紀氏も指摘しているように、当該地に見られる溝に区画された1町四方に広がる建物群は郡衙等の正倉の可能性は高いと考えられる。溝の区画の東側には同方向の側柱建物が見られ、郡庁等の施設に関連する建物という意見もあるが、倉庫群との関係は調査例も少なく、明確ではない。

**D群建物** 第107次SB01、07、SD04が相当する。SD04は真北に直交する東西溝である。SB009を切っており、C群の建物群に後続する。この溝は北側に折れて、長方形に区画する溝と考えられている。溝の延長は西側を第133次調査地点の南側の下水道調査地点、第55次調査地点、北側を第32次、第17次調査地点、東側を第77次調査地点で確認されている。南北長約88~100m、東西長85mの規模が想定されている。区画の内部に第107次では3×5間の東西方位の側柱建物、第77次調査地点で南北方位の側柱建物が検出されている。C群では総柱建物が多く分布し、郡衙等の正倉と考えられるが、D群は側柱建物が東西、南北方向に配置される。官衙等の施設と考えられるが、未調査部分もあり、建物の企画性を含めて今後の検討課題としたい。

各群の時期については、今回の調査では明確に決める資料は得られなかった。A群とB群、C群とD群は連続する時期と考えられるが、前者と後者では建物構造や配置などを見ると時期的な隔たりや建物の性格に大きな相違があるのではないかと考える。これまでの調査成果に従えば、B群は7世紀を前後する時期に、A群はそれに若干遅る時期と考えられる。C、D群については第3次や第124次で検出された大溝の掘削に見られる台地上の区画を契機としているため、大溝の掘削の時期以降と考えられる。溝の掘削時期については7世紀まで遡る意見もあり、遺構の上段は結論が出ていないが、C、D群は概ね8世紀代に位置づけられると考えられる。

おわりに 有田遺跡の古墳時代から奈良時代の集落の変遷を簡単に見ていくと、台地上には弥生時代から継続して6世紀後半まで集落は連続として営まれていく。5世紀代では陶質土器や軟質土器が多く見られる。この傾向は吉武遺跡群を始めとして、早良平野の遺跡では強く見られ、半島との強い関わりが伺える。6世紀代では竪穴住居跡が台地上の各所に見られる。しかし、6世紀後半以降になると、台地全体で竪穴住居跡はほとんど見られなくなる。竪穴住居跡から掘立柱建物へ住居形態が変化したと見るむきもあるが、7世紀代の住居形態は不明確である。この住居跡の減少と期を一にして、A、B群の建物群が出現する。つまり、建物群の設置にあわせて、住居形態や居住域に関して大きな変化があったと考えられる。同様の建物群が見られる比恵遺跡、那珂遺跡では有田遺跡群とは異なり、6世紀前半まで衰退気味だった集落に6世紀後半以降、竪穴住居跡、井戸等が増加し、それにあわせて建物群が出現する状況が見られる。その後も、7世紀中頃にかけて集落、官衙的遺構は継続していく、瓦等の遺物が継続的に供給される状況を伺うことができる。このように同様の建物群が見られる両地域を比較すると、建物群の造営に際して造営主体やそれぞれの地域の位置づけに相違があったと考えられる。

今回の調査成果に関して問題点を整理してきたつもりだが、有田遺跡群は190次近い調査が行われており、関連する成果を見逃していたり、事実誤認もあるかと思われる。現在、これらの建物群に関しては「那津官家」に関する施設と考えが多い。しかし、「那津官家」に関してはその記事の信憑性を含めて、その設置された場所にはさまざまな意見がある。ここではそれについて触ることはできないが、考古学的にも関連する遺構の検出例も増えており、6、7世紀の集落動向を含めて、今後の検討課題としたい。整理に際して有益なご教示いただいた米倉秀紀氏にはここで謝意を表したい。

#### 参考文献

山中敏史『古代地方官衙遺跡の研究』1994 塗書房

山崎龍雄編『有田・小田部第11集』『福岡市埋蔵文化財調査報告書第234集』1990 福岡市教育委員会  
米倉秀紀『那津官家?-博多湾岸における三本柱構と大型総柱建物群-』『福岡市博物館研究紀要第3号』1993 福岡市博物館

米倉秀紀『早良郡衙?-福岡市有田遺跡における官衙状建物群-』『先史学・考古学論究』1994 龍田考古会

菅波正人『那津の口の大型建物群について-福岡市比恵遺跡、那珂遺跡群の6~7世紀の様相-』『博多研究会誌第4号』博多研究会

なお、各調査地点の詳細については各報告書を参照いただきたい。報告書一覧は6頁に掲載した。

## 第4章 第184次調査の記録

### 1. 調査の概要

本調査地点は、早良区有田1丁目32-8に所在し、遺跡群の中央部最高所の北西側にある。

これまでの周辺の調査では南側隣接地の第133次調査で板付I式期の環濠、中世後期の溝等が検出されている。本調査地点は環濠の外側隣接地にあるが、該期の遺構は検出できなかった。また、東側約40mにある第56次調査地点では奈良時代の倉庫群が検出されている。本調査地点で検出した奈良時代の溝はこれらの建物と同一の方位をとっている。今回の調査ではこれらの周辺の遺構に関する成果が得られた。

調査前の現況は畠地で、約20~30cmの耕作土を除去すると、基盤の鳥居ロームとなり、その面で遺構の検出作業を行った。遺構面の標高は約12mである。

遺構は奈良時代の溝1条、中世後期の溝2条、柱穴等を検出した。遺物は溝から弥生土器、須恵器、土師器、輸入陶磁器等が出土した。調査は1997(平成9)年3月24日~4月11日まで実施した。調査面積は150m<sup>2</sup>である。

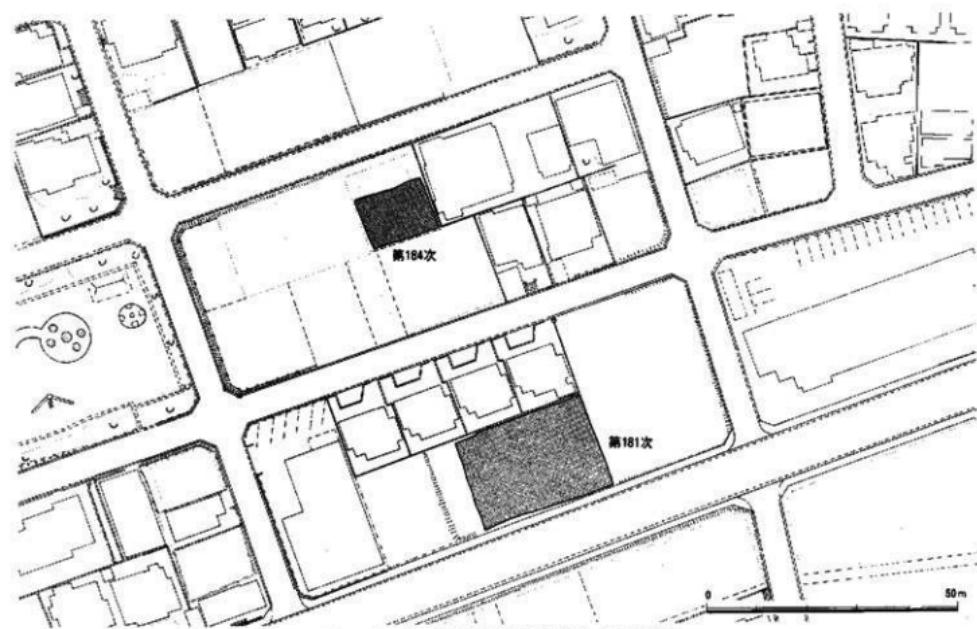


Fig. 24 第184次調査地点位置図 (1/1000)

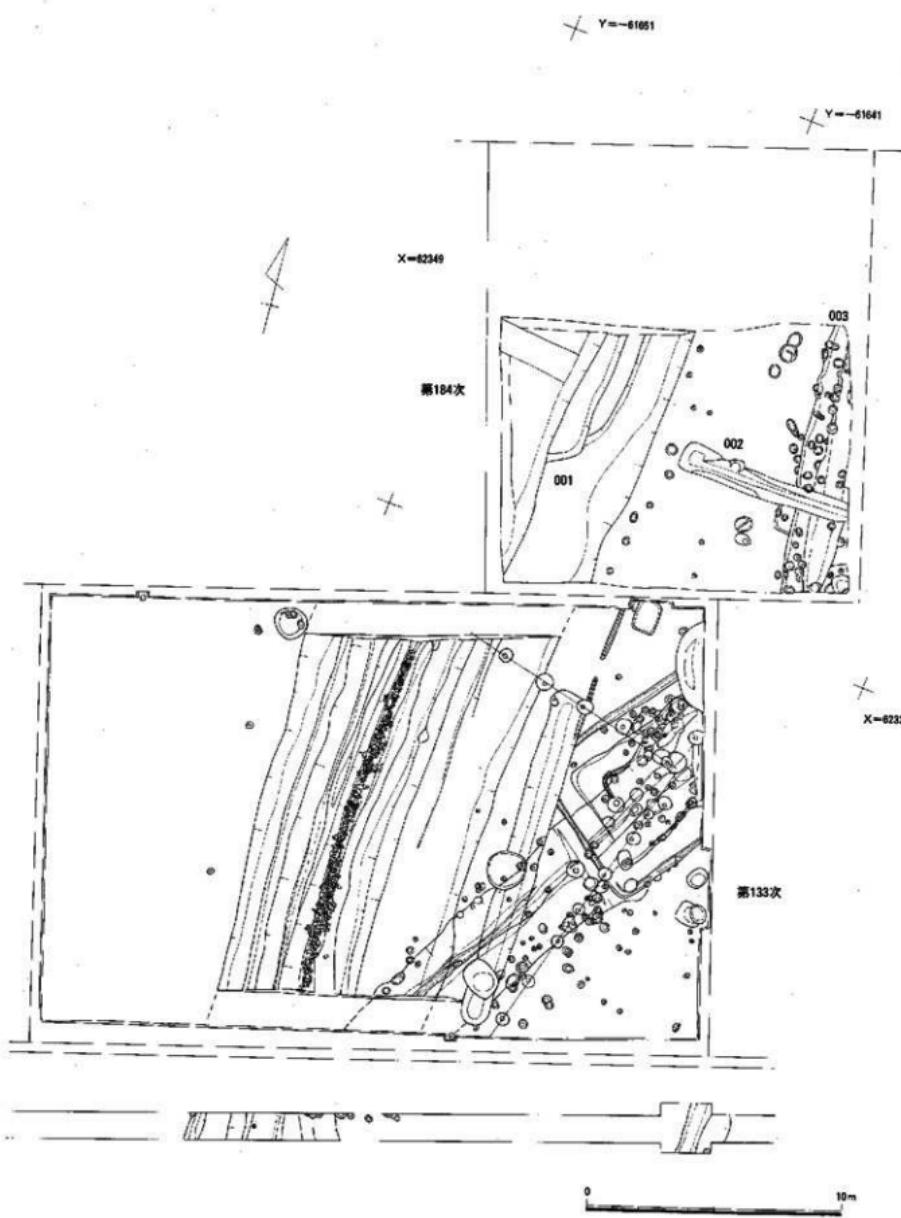


Fig. 25 第184次調査地点遺跡配置図 (1/200)

## 2. 調査の記録

### 1) 溝 (SD)

今回の調査では3条の溝を検出した。

#### SD001 (Fig. 26)

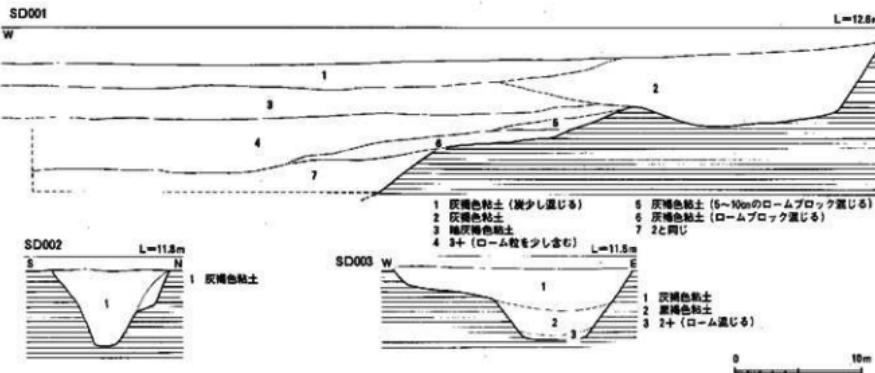
調査区の西側大半を占める溝で、西側の立ち上がりは調査区外となる。調査区が狭いことと湧水のため、溝の底まで掘り下げできなかった。溝は二段に掘り込まれ、東側には幅3m程のテラスがある。土層観察から東側は埋没後に幅3mの溝が掘り込まれている。今回の調査では11m分を検出した。SD001はN-2°-Eの方で直線的に延びる。133次調査で幅約8.5~9m、深さ2.1mの規模の溝という成果が得られている。遺物は埋土中から弥生土器、土師器、国産、輸入陶磁器等が出土した。

出土遺物 (Fig. 27-1~5, 15~17) 1は青磁の壺である。底部は露胎である。釉は厚く、淡緑色を呈する。2は青磁の盤である。高台の内側は釉を搔き取る。3は青白磁の合子身である。4は明代の染付の皿である。見込みに花文が描かれる。5は青磁染付の碗である。見込みは輪状に搔き取る。15は台形様石器である。横長剥片を素材とし、両側面にプランティングが施される。石材は黒曜石である。現存長3.8cm、幅2.1cm、厚さ0.8cmを測る。16は平基無茎式の打製石鑿である。石材は黒曜石である。現存長1.9cm、幅2.0cm、厚さ0.5cmを測る。17は蔽石である。上下両面、両側面、端部を使用する。石材は玄武岩である。現存長9.0cm、幅7.0cm、厚さ5.6cmを測る。

遺構の時期は周辺の調査成果から中世末に位置づけられる。しかし、埋土からは近世の遺物が多く出土しており、近世に溝の痕跡は塞みとして残っていたことが伺える。

#### SD002 (Fig. 26)

調査区の東側に位置する東西溝である。SD003を切る。溝は西側で立ち上がる。今回の調査では7m分を検出した。SD002はN-85°-Wの方で直線的に延びる。断面形は逆台形を呈し、幅0.9m、深さ0.6m、溝の底の幅0.2mを測る。第133次調査の溝SD02はこの溝に直交するもので、両者は屋敷などの区画の溝と考えられる。遺物は埋土中から弥生土器、土師器、国産、輸入陶磁器、板碑等が出土した。



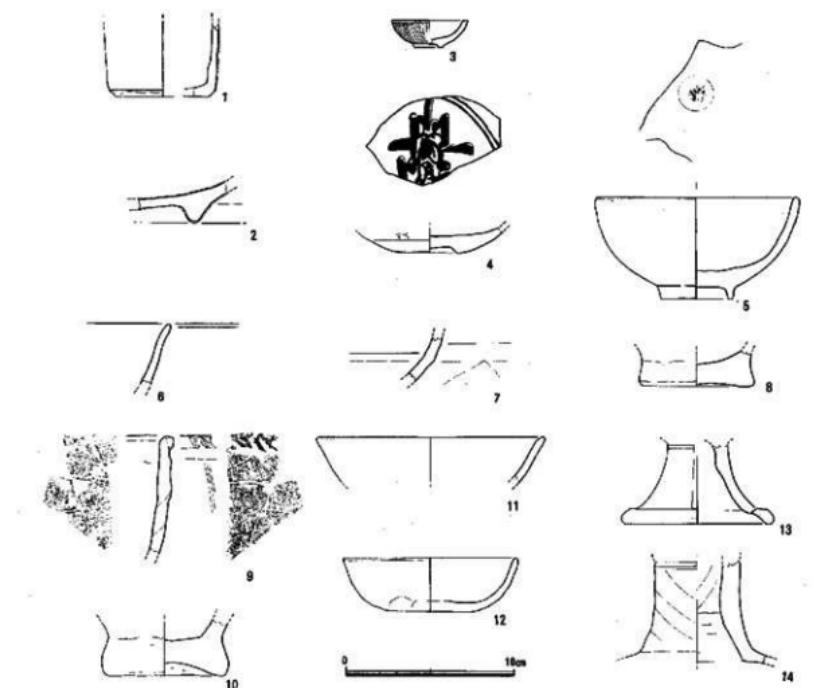


Fig. 27 溝出土遺物実測図 1 (1/3, 2/3, 1/2)

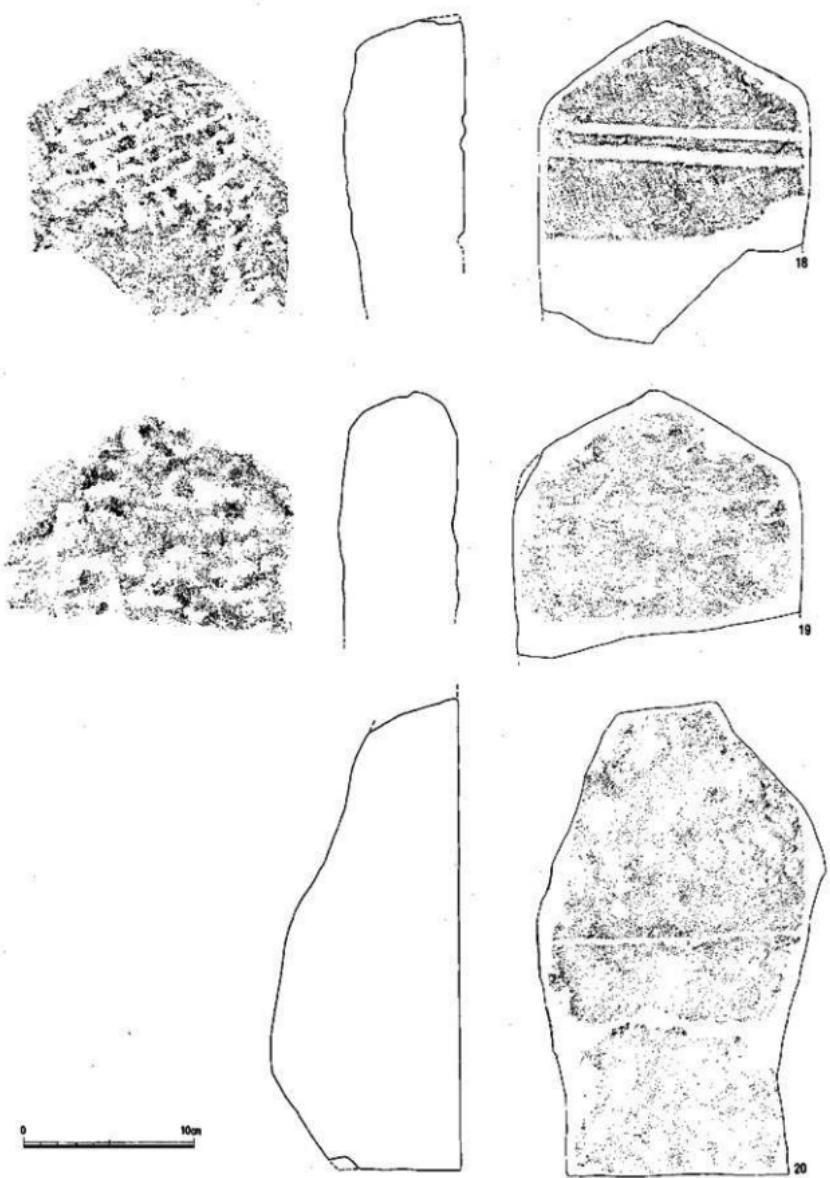


Fig. 28 溝出土遺物実測図 2 (1/3)

出土遺物 (Fig. 27-6~8, Fig. 28-18~20) 6は唐津焼の椀である。釉色は灰色を呈する。7は唐津焼の椀で、釉色は淡い青灰色を呈する。8は弥生土器の甕の底部である。底径9.4cmを測る。18~20は板碑である。石材は砂岩である。18は頂部、二条線の部分が残存する。19は器面の風化が著しい。

遺構の時期は周辺の調査成果から中世末~近世に位置づけられる。

#### SD003 (Fig. 26)

調査区の東側に位置する南北溝である。今回の調査では11m分を検出した。SD003はN-6°-Wの方位で直線的に延びる。二段掘りで、西側にテラスがつく。幅1.9m、深さ0.6m、溝の底の幅0.6mを測る。テラスにはピットが無数に見られる。遺物はテラスより上層とそれ以下の下層で取り上げを行い、弥生土器、土師器、須恵器等が出土した。

出土遺物 (Fig. 27-9~14) 9、10は刻目突帯文土器である。突帯は口縁端部につき、刻目は深いが、間隔は狭い。器面調整はハケメである。10は上げ底の底部で、底面はケズリが施される。11は溝の上層から出土した須恵器壊身である。口径13.6cmを測る。12は溝の下層から出土した土師器壊である。半底で、底部はナデである。器高3.2cm、口径10.2cmを測る。13、14は下層から出土した須恵器高壺である。13は長脚二段透かしの脚部と考えられる。14は器面にしづり痕が見られる。

遺構の時期は遺物が少ないため、決め難いが、7世紀代以降に位置づけられるものと考える。

### 3. 小結

今回の調査では古墳時代後期から古代の溝1条、中世末の溝2条、柱穴等を検出した。ここでは調査成果を概述していく。

本調査地点は有田台地の最高所を中心に巡る板付I式期の環濠の外側に隣接するが、今回の調査では該期の遺構は検出できなかった。遺物としては刻目突帯文土器、石礫、磨石等が少量出土した。

調査区の東端で検出した南北溝SD003は溝の一部を検出したに過ぎないが、幅約1.9m、深さ0.6m、中軸方位はN-6°-Wを測る。時期比定は難しいが、7世紀代以降に位置づけられるものと考える。この溝は規模や方位等から南側60mに位置する第181次調査地点SD001に連なるものと考えられる。第107、181次調査では溝の東側に大型の倉庫群が立ち並んでおり、これらの建物群の西端を区画する溝と考えられる。この溝は更に北側に延びるものと考えられ、延長を確認することで建物群の区画の範囲がより具体的になるものと考えられる。

中世末の溝SD001は南側隣接地の延長を確認した。この溝は台地上を巡る曲輪状遺構と想定されている。SD002は南側に隣接する第133次調査地点SD003に直交する溝で、屋敷などの区画の溝と考えられる。遺物としては板碑が出土しており、関連が注目される。

## 図 版 扇



有田遺跡群第181次調査地点検出掘立柱建物跡



1. 有田遺跡群第181次調査地点全景（西から）



2. 有田遺跡群第181次調査地点全景（北から）



1. SU011 完掘（北から）



2. SU018 完掘（北から）



1. SU019 完掘（東から）



2. SU021 完掘（南から）



1. SU020 完掘（北から）



2. SU020 遺物出土状況（東から）



1. SU022 完掘（南から）



2. SU026 完掘（東から）



1. SC013 完掘（東から）



2. SA003 及びSB005、006 検出状況（北から）



1. SB05 柱穴断ち割り（南から）



2. SB06 柱穴断ち割り（南から）



1. SB005、006 完掘（南から）



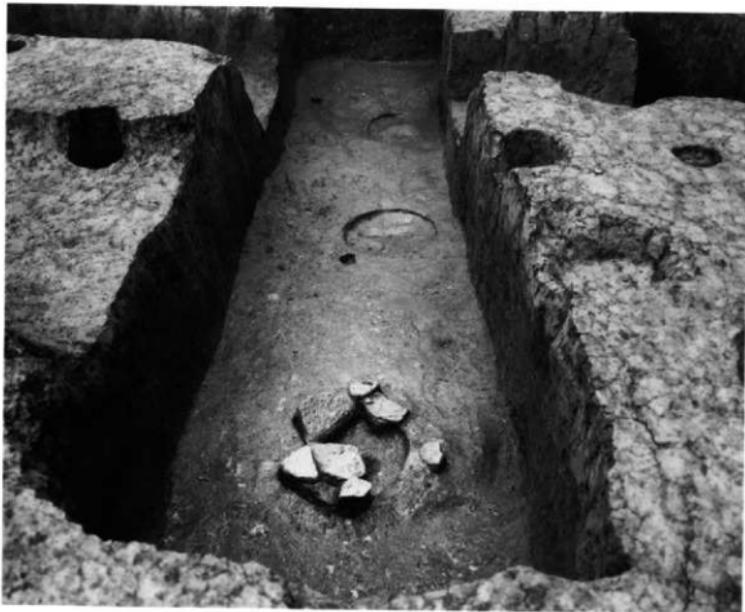
2. SB007、008 検出状況（北から）



1. SB008 柱穴断ち割り（北から）



2. SB009 完掘（南から）



1. SB009 根固め石検出状況（南から）



2. SD001 完掘（北から）



1. SD002 土層堆積（東から）



2. SK012 完掘（西から）



1. SK014 完掘（西から）



2. SK025 完掘（西から）



1. 有田遺跡群第184次調査全景（北から）



2. SD002、003 完掘（北から）



1. SD002 完掘（西から）



2. SD001 完掘（北から）

---

有田・小出部31

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第574集

1998年3月31日発行

---

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1-8-1  
印刷 弘文社印刷株式会社

---